

第39回 歴史を生かしたまちづくりセミナー

「石の記憶」

実施報告書

平成28年7月16日

公益社団法人 横浜歴史資産調査会
横浜市 都市整備局 都市デザイン室

第 39 回 歴史を生かしたまちづくりセミナー「石の記憶」
実施報告書

目 次

| | |
|-----------------------------|----|
| 1 開催概要 | 2 |
| 2 開催記録 | 4 |
| (1) 主催者挨拶 | 7 |
| (2) 横浜市認定歴史的建造物「横浜山手聖公会」の紹介 | 9 |
| (3) 横浜山手聖公会施工現場見学会の報告 | 10 |
| (4) 講演「石の記憶～横浜の歴史的建造物と石～」 | 20 |
| (5) パネルディスカッション | 34 |
| セミナー当日の配布資料 | 63 |
| 3 アンケート結果 | 80 |
| 4 広報ちらし | 84 |

(報告書中、敬称略)

1 開催概要

- (1) 名 称 : 「石の記憶」
- (2) 主 催 : 公益社団法人横浜歴史資産調査会(ヨコハマヘリテイジ) / 横浜市都市整備局
- (3) 共 催 : 公益社団法人日本建築家協会 (J I A) 関東甲信越支部 神奈川地域会
- (4) 後 援 : 大谷アカデミー
- (5) 協 力 : 日本聖公会横浜教区 横浜山手聖公会・横浜クライストチャーチ
- (6) 日 時 : 平成 28(2016)年 7 月 16 日 (土) 13:30-16:15 (受付開始 13:00)
- (7) 場 所 : 横浜山手聖公会 聖堂 (横浜市中区山手町 235)
- (8) 参加費 : 1,000 円 (ヨコハマヘリテイジ会員 700 円)
- (9) 申込み : 事前申込み制
- (10) 内 容 :
 - ・ 主催者挨拶
 - 宮村 忠 (公益社団法人横浜歴史資産調査会 会長)
 - 小池 政則 (横浜市都市整備局企画部 部長)
 - ・ 横浜市認定歴史的建造物「横浜山手聖公会」の紹介
 - ・ 横浜山手聖公会施工現場見学会の報告
 - 笠井 三義 (J I A 神奈川 / カサイアーキテクチュラルデザイン)
 - ・ 講演
 - 「石の記憶～横浜の歴史的建造物と石～」
 - 青木 祐介 (横浜都市発展記念館 主任研究員 / 横浜市歴史的景観保全委員)
 - ・ パネルディスカッション
 - (パネラー)
 - 安森 亮雄 (大谷アカデミー学科指導長 / 宇都宮大学准教授)
 - 鈴木 裕士 (金谷美術館理事長)
 - 木嶋 房由記 (世界遺産アカデミー認定講師 / 木嶋房由記建築研究所)
 - (コメンテーター)
 - 青木 祐介
 - (コーディネーター)
 - 米山 淳一 (地域遺産プロデューサー / 公益社団法人横浜歴史資産調査会 常務理事・事務局長)
- (11) 参加者数 : 約 90 名

2 開催記録



歴史を生かしたまちづくりセミナー
【石の記憶】

開 会

・進行：内山 哲久（横浜歴史資産調査会社員）

当セミナーを開催するにあたり、その開催趣旨として一言申し上げます。横浜市では昭和63（1988）年に「歴史を生かしたまちづくり要綱」を制定し、横浜の歴史的景観や歴史的建造物等の保全活用を進めて参りました。また、市民の皆様幅広く歴史的景観や歴史的建造物等の魅力を知ってもらい、親しんでもらうことを目的に、毎年「歴史を生かしたまちづくりセミナー」を開催いたしております。

横浜の歴史的建造物は、おおやいし ぼうしゅういし かまくらいし さじまいし大谷石、房州石、鎌倉石、佐島石など各地の石切り場から横浜の港を通して集められた「石」によって彩られて参りました。

今回は、横浜・山手のランドマークでもあり、大谷石で仕上げられた外壁が特徴の「横浜山手聖公会」の聖堂（礼拝堂）を特別にお借りして、横浜の歴史的建造物と石をテーマにセミナーを開催させていただきます。

なお、本日のセミナーは横浜山手聖公会の特別のご協力のもと、横浜市都市整備局並びに公益社団法人横浜歴史資産調査会の主催、公益社団法人日本建築家協会神奈川地域会との共催、そして大谷アカデミーの後援のもと、開催いたしますことを申し添えます。さらに今回のセミナーは教会の聖堂を特別にお借りしている関係で、貸し会議室や市民公会堂等とは異なり使い方に制約があります。特に祭壇のある聖堂においては配慮の必要がありますので、何とぞ立ち入らないようご理解ご協力をお願いいたします。

(1) 主催者挨拶

・宮村 忠（公益社団法人横浜歴史資産調査会 会長）

今日は「石の記憶」というテーマでセミナーを開催いたします。「石の記憶」ということで思い出すのは、宮城県気仙沼市の唐桑半島の付け根の丘陵地のところに、広田湾に面した小さな集落で採石される大理石のことです。その石を東京日本橋の三越の正面玄関にあるライオンの台座用、館内の化粧用の石として内部を飾っています。中学生のとき、お中元の際、母親の荷物持ちで三越に行ったとき、正面玄関に入ったすぐの階段のところの大理石の壁の中にアンモナイトなどの化石を見つけました。これは現在でもありますが、そこには説明があって、これは唐桑半島から持ってきたと書かれています。私には「石の記憶」というと、これが懐かしく思い出されます。

それから「石の記憶」というと いなだいし 稲田石 が思い起こされます。稲田石は みかげいし 御影石 ですが、これは笠間市稲田から産することでその名があります。これは建築石材として有用で、明治末期に東京大改造がなされ、その一つである日本橋も石橋として改造されますが、その際の石材としてこの稲田石が使われているからです。横浜などでも御影石のような固い石ではなくて、今日これからお話しされると思いますが、大谷石のような柔らかくて細工のし易いということでもかなり使われているということを聞いています。今日はこの大谷石を中心としたセミナーを開催するということで、聖公会には大変なご配慮をいただいたということですので、ご披露します。

今日、これから始まりますセミナーをお楽しみいただければと思います。よろしく願います。

・小池 政則（横浜市都市整備局企画部部長）

今日はお暑い中、山手の丘の上までお運びいただきありがとうございます。おそらく皆様も汗をかきながらこの聖堂に来られたと思いますが、聖堂に入ったら少しほっとするような少しひんやりするような感じがあったかと思えますが、この建物が石造りであるということも関係しているのでしょうか。

今日は、「歴史を生かしたまちづくりセミナー」ということで、これは毎年行っているのですが、前は失われていく横浜の建物をどう残していけばいいのかということをテーマに行いましたが、今回は「石の記憶」というテーマで開催させていただくことになりました。

横浜の歴史的建造物を石というものを通じて見た時に、どういう新しい視点が出てくるのか。このセミナーが始まる前に隣の展示室でパネルなどの展示物を見てきたのですが、今日は大谷石、房州石ということで宇都宮や千葉との繋がりも出てくると思います。横浜の街が港ということでいろいろな地域とのつながりで街が発展してきたということが、今後のまちづくりの何かヒントが隠されているのではないかと考えているところです。

今日は各地から石の専門家や建築の専門家の方々にお越しいただいていますので、楽しいお話

が伺えるのではないかと期待しています。

普段は一般の方々が入れないこの山手聖公会の聖堂を「石の記憶」というテーマでセミナーを開催したい旨をお伺いすると快くお貸しいただけるということでご協力をいただきました。聖公会の方々に改めて御礼申しあげたいと思います。さらに今日皆様の資料の中に聖公会から記念ということで絵はがきが2枚入っております。この件につきましても重ねて御礼申し上げたいと存じます。

それから私どもの宣伝になるのですが、資料の中に、「歴史を生かせ ふるさと納税」と書いたちらしが入っていますので、ご一読いただきたいと思います。これはふるさと納税制度を活用して、横浜の歴史的建造物保存に役立てようという趣旨ですので、ご理解の上ご協力をいただければと思っております。

今日、これから半日の時間ではありますが、みなさんそれぞれが歴史的建造物を考えるきっかけとなっていいただければと思っておりますので、よろしく申し上げます。

(2) 横浜市認定歴史的建造物「横浜山手聖公会」の紹介

・小田嶋鉄朗（横浜市都市整備局都市デザイン室担当係長）

資料の中にもございますので簡単にご説明させていただきます。現在の横浜山手聖公会は J.H モーガンの設計による建物です。沿革ですが、文久 2（1863）年に、現在の中華街の地にクライストチャーチとして建立されました。その建物が明治 34（1901）年に現在の山手の地にコンドルの設計により移転、建立されました。それが大正 12（1923）年の関東大震災により倒壊し、昭和 6（1931）年に現在の建物が再建されるわけです。そして平成 2（1990）年には横浜ゆかりのモーガンの設計ということ、山手のシンボリックな建物であるということ、幾多の困難を乗り越えて再建してきたこと等の評価を得て、横浜市歴史的建造物として認定されております。その後、平成 17（2005）年に火災で屋根の部分が焼け落ちるという残念なことがありましたが、それも乗り越えて再建され、さらに正面のステンドグラスも再生され、本年、外壁の大谷石を含めた外観保全工事を経て現在の姿になっております。

本日は、聖公会のご好意により普段はお借りできないこのような場所でセミナーを開催できることを喜ばしく思っており、御礼を申し上げたいと存じます。

こういった歴史的建造物はこれからも残していけるようにわれわれも努力して参りたいと思いますので、皆様方もご協力いただければうれしく思います。ありがとうございました。

(3) 横浜山手聖公会大谷石施工現場見学会の報告

・笠井 三義（日本建築家協会 カサイアーキテクチュラルデザイン主宰）

今年の5月24日に、この山手聖公会の外壁改修の技術者向けの見学会に参加させていただきました。午前、午後の2部で約40名の建築技術者の方で、各1時間見学させていただきました。

なぜ技術者向けの見学会かということですが、足場に登っての見学会ということになります。私などは設計監理などをしていると、現場に行くと足場に登ることもあります。この建物の場合、外壁の改修ということ、外壁自体が貴重なものであるということで、足場に対する控えが普通の新築であると結構しっかり取りますが、この建物の場合外壁が大谷石で脆いということもあって、控えがない、結構揺れるような足場であるわけです。そこで皆様に登っていただくということとはできないので技術者で見学会をとということにさせていただきましたということです。今日の議題に併せて私の方では宿題をもらっていて、当日の話をまとめてほしい、そうすると石の記憶ではなくて自分の記憶になるという余録もありました。

実は平成22（2010）年に日本建築家協会横浜松坂屋のテラコッタの外壁の見学会をやりました。間近に見る材料は、下から見る材料とは違った有意義なものであります。今回、山手聖公会のご協力のもと、横浜市都市整備局、横浜歴史資産調査会、また現場を請け負った大谷石産業株式会社の方々の並々ならぬ努力により見学会をさせていただいたことを、ここで感謝の気持ちを表したいと思います。

現場の中の様子は、全体的に足場に登って見学することができました。かなり揺れながら進みましたが、その時に撮った私の写真です。屋根の最上階の部分まで登ることができました。

これは当日配られた資料の中の立面図ですが、この中に事前の調査ですごく細かく書かれたものがあり、現場の調査をやって最初に改修方法を決めているわけです。現場に登ってみるとやはりそれら何カ所かを修正しながらやっていくということがこの表から見受けられます。現実的には後に写真が載ってくるのですが、赤いテープのところは石の交換がされたところで、その数88カ所、そして黄色いテープのところは補修がされたところで122カ所、緑のテープのところはピン打ちと言って6ミリ×180ミリのステンレスのピンで大谷石を落ちないように打ち込んだところで188カ所あります。補修域は東西南北4面があって、その合計でその数になっています。これを見ると、4月1日から90日間の工期の中の5月24日に見学会を行いましたので、そのちょうど中間の時期に見せていただいた時の写真ということです。

窓周りですが、無垢の石で飾り加工をしております。事前に原寸取りということで、型を取って大谷の方で加工してきたということの説明を受けました。ただ現地で写真を見ていくと分かるのですが、やはり下地を剥がしていくとなかなか設計通りにはいかなくて、現場加工をしている苦勞がその日の写真でも見受けられます。

全体の改修が終わった後には、大谷石は水を吸うと脆くなる性質がありますが、この建物も7年前に外壁に劣化防止剤を塗布したということを知っています。今回もこの全体の改修が終わった後には劣化防止剤を塗るそうです。

過去4回の改修があったということですが、昭和20(1945)年に戦災によって屋根が破壊されて昭和22(1947)年にアメリカの援助によって復旧されたと。あとは平成5(1993)年に改修されて、平成17(2005)年、火災による改修、そして平成22(2010)年に改修ということで、非常に手間ひまかけて改修されている建物であるということです。

現場を見て実感を新たにすることがあります。大谷石という石は、いろんな文献によると「大谷石を貼る」という表現になっています。ただしこの現場で大谷石の施工の職人の方に聞きましたら、厚みが9センチ、ブロックより1センチくらい厚みの薄い石が外にずっと積んである、石を積んでそこにコンクリートを流している、ですから貼っている石ではないということです。そういう認識を新たにしました。貼っている石ではないので改修方法も、後ほど図面のスケッチがありますが、変わってきていると。

これが昭和6(1931)年に施工されているということですから、少しエピソードを紹介しますと、生糸検査所の北棟ということで、同じく昭和6(1931)年の記録によるのですが、コンクリートは当時すごく高額であったということです。打ち込み^{でま}手間^まと言って、コンクリートを現場で練ったものを流し込む、そういう手間賃が、当時の価格で1立米あたりの費用が21.6円、鉄筋は加工共で1,430円だそうでした。この当時の監督員の入社6年目の月給が56円ということで、そうしたエピソードが載っておりました。単純な比較はできませんが、コンクリートが今の単価でいいますと約5倍、鉄筋は50倍という値段の時代だったわけです。そのような時代背景の中でこの建物が建てられたということを知って認識を新たにしました。

これは「横浜・長崎教会建築史紀行」という本の抜粋ですが、関東大震災の被害によりこの山手聖公会以外の、この近辺の山手教会、指路教会、横浜海岸教会の4棟はコンクリートの建物で耐震性と耐火性をもとにこの時期に建て変わっております。当時の写真が右側の写真です。これにも外壁に貼られた大谷石という文言がありまして、正面から見てはなかなかわかりませんが、そういった部材を積んだということで最初から大谷石を使っていたようです。

これは横浜歴史資産調査会と横浜市が発行している「横濱新聞」の記事ですが、先ほど平成2(1990)年に認定歴史的建造物になったという表題と、平成5(1993)年に修理修復が完了したこと、平成7(1995)年にはブラケットとか玄関の庇の改修が終わったこと、さらに平成17(2005)年には火災による被害、平成18(2006)年には火災の被害の中で無事改修が終わった外部と内部の写真、そして平成27(2015)年には壁面の改修が終わったということが掲載されており、こうすることで非常に手間ひまかけてこの建物を愛され続けているというのが見受けられます。

先ほどの9センチというのは技術的なことで難しいのですが、真ん中の写真がそうですが、実は9センチの厚みの中はコンクリートなのです。9センチを全部取り外すのはコンクリートを傷つけるので、9センチの約半分くらい、約3~4センチくらいをはつり取っている写真なんです。

先ほどの赤とグリーンのところはピン補強で、赤のところは石の交換をする下準備をしているところです。残りの3~4センチくらいを削ったところに新たな石を貼付けている、こういうこと

になっています。

これが古い石（茶の部分）と新しい石を張り替えたところ、このような見え方になっています。

3〜4センチを削ったあとに石を接着剤で貼付けているところです。

いま普通に貼るという工事をやる場合にはコンクリートの上にステンレスの受け材を付けて浮かせて着けるのが標準ですが、この建物はそういうことになっていないという説明です。

これは窓周りということですが、これは全部無垢になっていますので一旦剥がしているところです。

これは型取りしたものを工場で削ってきているものです。ただ現場をはつてみると下地の状況は個々に違うわけです。その下地に合わせて形を整形するといった細かい作業が結構出ています。

それからコンクリートの部分が少し露呈していますが、この部分は外側の石を先にやって後からコンクリートを流しているためにジャンカといって、コンクリートが巣状になっているところも見受けられました。

接着剤だけだと落ちる危険性もあるので、ステンレスのピンを斜めに打ち込んでいます。9センチの厚みの大谷石に対して18センチのピンを打ち込んでいます。実はこれはピンを打ち込んでいるところの写真ですが、本当にわかりません。この写真では2カ所くらい見受けられますが、遠くからはわかりません。

これが張り替えの石ですが、工場で加工してきたものを現場で貼付けるという状況になっています。

私はパッチワークという表現をしたのですが、石がパッチワーク状になっているということであらわしています。全部取り替えればいいのではないかということもあるかと思いますが、予算との関係で全部取り替えるより元の石があった方がいいというオーセンティックという考え方でいうと極力昔のものは残した方がいいということから、こういう細かい作業をしております。実はここ、色が少し違っているのが分かると思うのですが、ここに線が1本入っています。はつて3センチの薄いものをもう一度ピタッとくっつけるというすごい技術をもとに、パッチワーク状にやっています。

裏側の方は火災で少し変色していて、そのあたりはジーンズのごとく少し年代を重ねたイメージだという表現を入れました。

実はこれは木造のお寺の柱にある根継ぎという構法なんです。木造も当然100年、200年を超えますと下が腐ってきます。その時の工夫というのは、木造建築は元来すごく技術が発展していて、よく見るとわかるのですが、柱の下の腐った部分は必ず取り替えをしているんですね。山手聖公会は石の建物ですが、そのパッチワークというパターンがいろんな技術の集合体で出来上がっているということ、そういうことを私は見学会で感じたことの一つです。

これ以外は塔の上の部分、イギリスのノルマン様式という、城壁を模したようなデザインの建物になっています。樋の周りとか水切り石とか、お城のようなデザインになっています。

モーガンの事務所は関東大震災以後、横浜に事務所を構えていました。彼の設計の建物は、ユニオンビルとかアメリカ領事館など、今は無くなっています。これは山手 111 番館、ラフィン邸という建物です。これは現在は中に入ることは出来ませんが、根岸の競馬場跡、これは今後文化遺産としてどうするかという大きな課題となるのではないですかね。あとはニューグランドホテルの 5 階部分の増築もモーガンの設計であります。あとはベリックホール。これは関東学院の中等部の校舎ですが、今年一部を保全しながら、本体は解体ということを知っています。そして藤沢にあるモーガン邸、これも 2 度の火災を受けていますが、いま部材が一部残されているので今後修復していこうということでやっています。ですからモーガンは、横浜にとってかなりゆかりの建築家です。

これは栃木県宇都宮市の大谷にある大谷石資料館です。これは昔、大谷石を採って残った空洞跡ですが、昭和 40 年代に採り終わって、その後いろんなイベント等をやっています。

今回使われる大谷石がどこから来たのかということですが、ここの石の郷希望というところから掘られた石だと聞いております。実はここに 7 メートルの縦穴がありまして、約 50 メートルの深いところからこういう石を採掘しているところです。この現場の石もこの 50 メートルの現場の奥の方から掘り出されたのではないかと思います。今の石はこういうところから産出されています。

それから今も稼働しているのですが、昔は露天掘りというということで採っていたようですが、今は非常に少なくなっております。

宇都宮には、横浜山手聖公会と兄弟教会とも言える教会がありますが、ノルマン様式とは少し違うということが書かれています。ここも大谷石で造られた教会です。

これも松が峰教会で、全部が大谷石でできています。これも貼ってあるという表記がありますので、そのあたりがどうなのか聞いてみたい気がします。

大谷石というとフランク・ロイド・ライトということで、これはいま犬山市の明治村にある旧帝国ホテル。そしてこれは神戸にある山村邸の図面で、実は大谷石の中にコンクリートを打ち込んでいるという説明書きを見つけました。これは池袋にある自由学園、やはりライトの設計で、このあたりが大谷石を使っています。あとは加地邸というライトの弟子の遠藤新の設計による建物です。これも大谷石が結構使われています。

このようなことで、見学会の報告と若干私の感じたことの報告を終わります。ありがとうございました。

横浜山手聖公会改修工事施工現場見学会の報告

2016年7月16日

日本建築家協会 (JIA神奈川) 笠井 三義

1

5/34 午前午後、受付状況

会場、大田区産業 緑地公園、聖堂に当たっての事前説明



2



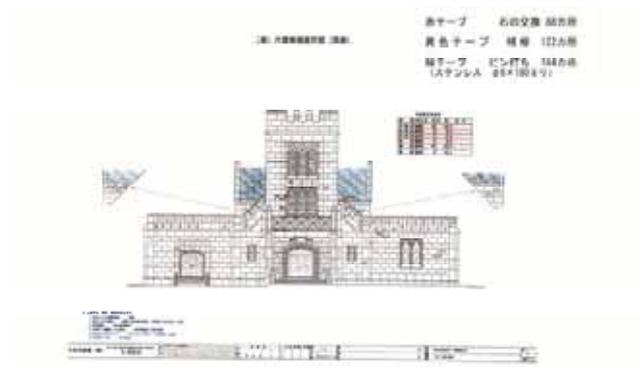
3



4



屋根、スレート敷付



赤ヤープ 石の交差 緑地帯
黄色ヤープ 緑帯 (12カ所)
緑ヤープ ヒンケル 13カ所
(バタシレン 25カ所あり)

(注) 大田区産業緑地公園

6



赤テープ 石の交換 既設所
 黄色テープ 補修 122カ所
 緑テープ ビン付も、184カ所
 (スタンレス 48×180ミリ)

19



赤テープ 石の交換 既設所
 黄色テープ 補修 122カ所
 緑テープ ビン付も、184カ所
 (スタンレス 48×180ミリ)

この山手聖公会は、約10cmの厚みの天然石を積み上げ、外壁の厚みでコンクリートを行った様である。
 打ち込みサイズと間に隙間が空かれる。高圧洗浄するとコンクリート表面が剥れてツヤンカになっているところが見受けられる。

20



- ① 写真説明
- ② ①と同様に石の交換(既設所)と補修(黄色テープ)が行われている。
- ③ ①と同様に石の交換(既設所)と補修(黄色テープ)が行われている。
- ④ ①と同様に石の交換(既設所)と補修(黄色テープ)が行われている。
- ⑤ ①と同様に石の交換(既設所)と補修(黄色テープ)が行われている。

赤テープ 石の交換 既設所
 黄色テープ 補修 122カ所
 緑テープ ビン付も、184カ所
 (スタンレス 48×180ミリ)

21



赤テープ 石の交換 既設所
 黄色テープ 補修 122カ所
 緑テープ ビン付も、184カ所
 (スタンレス 48×180ミリ)

赤テープ 石の交換 既設所
 黄色テープ 補修 122カ所
 緑テープ ビン付も、184カ所
 (スタンレス 48×180ミリ)

年代を重ねた、ジョーシ式の積り方

22



半透の柱杭文 補修あり

(1) 既設所

(2) 補修あり

(3) 補修あり

(4) 既設所

23



タワラレアーロン (補修の既設)

ケルト十字型

フィニアル (既設)

モールド型

24

タワー・テレーンション (城壁の残骸)



紅土館 池原リサ

建まり方



国ユニオンビル・アメリカ合衆国



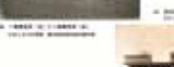
ニューグランドホテルのF階展示室



山手111番館



山手111番館



ペリックハウス

モーガン自伝 (2階の復元 残った部分保存)

モーガン自伝 (2階の復元 残った部分保存)

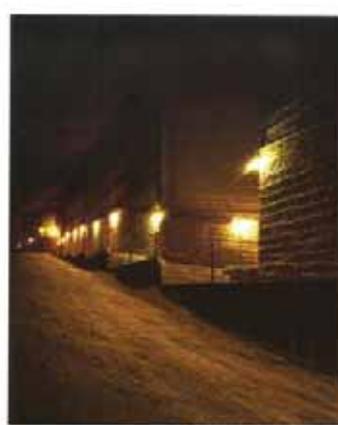


国英学校中學校 (4号館第一層復元)



大石資料館

大石資料館
住所: 東京都中央区本町2-1-1
TEL: 03-5561-1111
URL: http://www.ohishi.com/



坑内様子 整頓



掘削様子



(4) 講演「石の記憶～横浜の歴史的建造物と石～」

・青木 祐介（横浜都市発展記念館主任調査研究員／横浜市歴史的景観保全委員）

<スライド1>

都市発展記念館の青木です。今日のテーマは「石の記憶-横浜の歴史的建造物と石」ということで、横浜のまちづくりの歴史のなかでどういう形で石が使われてきたのか、という視点でお話させていただきます。

<スライド2、3>

まずは、江戸時代の終わりから話を始めたいと思うのですが、こちらは開港後の万延元（1860）年につくられた神奈川台場です。

現地に行けば当時の石垣が何カ所かで見られますが、使われているのは伊豆石いずいしや真鶴石まなづるいしです。平成23（2011）年にはマンションの建設予定地からも石垣の一部が発見され、現地のマンションの中で一部が公開されています。

神奈川台場は軍事施設という特殊な事例ですが、基本的に近世においては、石は広く流通していた材料で、墓石や灯籠など様々な形で使われています。横浜でいえば、神奈川湊がそうした石の流通の拠点でした。今日は近代の話が中心ですが、石についていえば、近代というよりは近世から流通していたものであるという前提をまず確認しておきたいと思います。

そして横浜が開港して、現在の関内地区を中心とした街がつけられていくわけですが、初期の様子がわかるのが、慶応元（1865）年実測のこの地図です。

中央が現在の大栈橋のあるところですが、ここに波止場が出来て、税関である運上所を境に東と西で外国人の居留地、日本人の市街地というまちづくりがなされます。これを見ると、外国人居留地の沿岸部にすでに石積みの護岸が築かれており、波止場の突堤のところも石垣が築かれていることがわかります。逆に日本人市街地はまだ自然の海岸線が残っていて、外国の公使館のある西端の一角は、埋め立てによって整備されていることがわかります。

<スライド5>

この時点で現在の堀川にあたる部分が開削されており、関内地区は水に囲まれた出島のような状態でしたが、明治10年代の着色写真を見ると、外国人居留地の海岸部分は、海から見たときの居留地の顔として、石積みの護岸、積み方でいえば布積みの護岸がずっと伸びている光景だったことがわかります。

<スライド6>

こちらは堀川を逆方向に見た写真ですが、先ほどの実測図が描かれた翌年に横浜は大火事になります。その火災の後で大きく居留地の改造が行われ、そこにイギリス人の技師ブラントンが登場するわけです。ブラントンというと横浜公園や日本大通りをつくったことで知られていますが、堀川の開削と護岸の整備もやっています。

この写真は堀川の護岸工事が完成した後に撮られたもので、向こう側に元町が見えますが、こ

の元町側の先端部分に、開港後の文久元（1861）年にイギリス海軍の物置所が設置されます。

<スライド7>

こちらの着色写真は明治10年代のものですが、海軍物置所のところの布積みの護岸の様子がよくわかります。

<スライド8、9>

海軍物置所の海側は大正時代になって埋め立てられ、現在の新山下になるのですが、この場所は現在、ドンキホーテの店が建っていて（注：2016年9月11日で閉店）、入口右手のスロープを登っていくと写真のような護岸が残っています。見る限りでは、後世に手が加わっていると思いますが、かつての居留地の海岸線の位置を示す貴重な遺構だといえます。

<スライド10、11>

続いて日本人市街地の方を見ますと、明治の初めになって西端の海岸部に灯台寮という役所ができます。ここは全国の灯台の部品をつくる工場で、先ほどのブラントンも宿舎を構えていました。「かねの橋」といわれた吉田橋の鉄材もこの工場で作られ、そういう意味では近代産業遺産の原点ともいえるところです。

<スライド12、13>

この灯台寮に関しては、地形図にも描かれている突堤部分が、「旧灯台寮護岸」として認定歴史的建造物になっていますが、灯台寮の敷地の一画が横浜市の新市庁舎予定地に含まれており、昨年発掘調査が行われました。そこで出てきた護岸がこちらです。

<スライド14>

明治10年代の地形図を見ていただくと、灯台寮は河口のあたりで少し出っ張っているのですが、この図と発掘調査の結果を合わせると護岸はさらに内側に位置していることがわかりました。記録には明治元年にここに護岸を整備し工場を建設したと出てきますので、その位置よりも内側ということは、それ以前の幕末に遡る石積みということになります。先ほどの新山下の護岸が後の時代に手が加えられたものだとする、こちらは江戸時代の終わりの状態のまま出土した非常に貴重な護岸の遺構だと言えます。この場所は新市庁舎の地下部分とはぶつからないはずですから、何ものなればこのまま残していただけたらと思いますが、どうでしょうか。

このように幕末から明治にかけて、いま見てきたような布積みの護岸が広がっていくわけですが、明治20年代の地図を見ていただくと、堀川や派大岡川にはたくさんの船が描かれています。当時横浜のまちはこの運河に囲まれていて、そこを流通の担い手である舟が行き交っていました。

<スライド15>

現在、派大岡川は埋め立てられて首都高になっていますが、JR 関内駅のあたりから吉田橋を見た写真がこちらです。明治の初めに架けられた鉄橋の吉田橋が写っています。左側に見える煉瓦の建物は伊勢佐木警察署で、右側に塔が見える建物が横浜指路教会です。

港北区に飯田家という旧家がありますが、飯田家は鶴見川の流域で明治10年頃から製氷をやっ

ていて、その氷室が真砂町にありました。写真右側に見える河岸が荷揚げの場所だったのではないかと思います、ちょうどこのあたりの護岸が現在も残っています。

<スライド16>

この護岸はNHKのプラタモリ横浜編で出てきたのでご覧になった方がいるかもしれませんが、関内駅の駅長室の真下に地下空間があって、そこに潜るとこういう石積みの護岸が残っています。

<スライド17>

ざっと見て年代的に古いと思われるものを写していますが、手前には護岸の石だったと思われるものもゴロゴロしています。戦後の根岸線工事のときに地下に埋もれてしまったのでしょう。

番組の中で駅長さんは改修工事が進めば無くなると言っていました、無くしてはいけないものですね。今の駅舎の計画ですと、このあたりの地下はいじらず広場ができるだけの計画なので、おそらくこの護岸も壊されずに残るのではないかと思います。横浜というまちが、かつては舟運で栄えていた川のまちだということを教えてくれる大事な遺構です。

<スライド18、19>

いま紹介してきた護岸は、^{けんちいし}間知石積みといって在来的な工法です。それに対して近代以降の新しい石積みとして登場したのが、この山手地区に非常に縁の深いブラフ積みという工法です。

今日はさすがにこの話をしないと許されないと思って、少しブラフ積みの資料を用意してきましたが、ブラフ積みに関しては、教育委員会が発行した『横浜山手』という報告書があります。その中で堀勇良先生がまとめられているものが一番詳しく、研究の基礎になっているものだと思います。

これは谷戸坂のところのブラフ積み擁壁ですが、堀先生のブラフ積みの説明をまとめると、ポイントは大きくは4点あります。1点目は「材」。1尺×1尺×3尺（長さ）という直方体の房州石を使っていること。2点目は「積み方」。煉瓦で言えばフランス積みにあたりますが、長手と小口を交互に並べるという特徴的な積み方をしていること。3点目として、それまでの間知石積みという四角錐の石を使った石積みとは異なる、「洋風の石積みの系譜である」ということ。最後の4点目。ブラフというのは、かつて山手にあった外国人居留地の通称なのですが、この石積みが山手特有の積み方であることから、ブラフ積みという名称を堀先生が提唱され、今はこれが定着しています。一方で、山手以外にもこのブラフ積みが各地で見られます。

いまお話しした3点目と4点目に関して、とくに新しい解釈があるわけではありませんが、少しそのあたりのことを丁寧に見たいと思います。

<スライド20>

いつ頃から山手にブラフ積みが出てくるのか、正確にはわかりませんが、例えば古写真の中にこういったものがあります。これはイギリス海軍病院、現在の港の見える丘公園のところですが、谷戸坂を登っていったところに入があるのは今も同じですが、道路と病院のあいだにかなりの高低差があることがわかります。現在も公園の入口からは緩やかな坂になっていて、高低差がそ

のまま残っています。撮影時期はおそらく明治の初め頃だと思いますが、見ておわかりのとおり、この時点では現在ブラフ積みといわれるような石積みの擁壁はどこにも見当たりません。写っているのは木の柵です。

<スライド 21>

一方、こちらの写真は明治の終わりから大正の初め頃のイギリス海軍病院ですが、入口の左右にはブラフ積みの擁壁がはっきりと写っています。ある段階で、木の柵からブラフ積み擁壁へと整備されたことを示しています。

では、記録のうえではいつ頃から山手に石積み擁壁が出てくるのか。これも堀先生の受け売りになりますが、だいたい明治 10 年代の神奈川県公文書に、木の柵だったところを「修造」という言葉が出てきます。いま神奈川県のデジタルアーカイブでは、公文書館が持っているこの時期の文書が見られますが、そのひとつに木の柵が腐ってダメになったから改修するという文書がありました。そこには房州石、伊豆石の 2 種類の石が書かれていましたが、分量をみるととても擁壁をつくるだけの分量はないので、本格的な擁壁工事ではないかも知れません。ただこうした記録から、およそ明治 10 年代に石積みの擁壁へと変わっていったことが想定されます。

<スライド 22、23>

そのほか、ある程度年代が想定できる擁壁の一つは、山手ではなく、西区の掃部山公園にある擁壁です。掃部山公園は元々鉄道省の用地だったところですが、そこに古いブラフ積みの擁壁が残っています。現在残っている擁壁は、防災上の理由で平成 8（1996）年にいったん解体して積み直したものですが、これを明治 5（1872）年の鉄道開通時の整備と考えるならば、現存しているものの中では一番古いものになります。そうすると、実はブラフ積みは山手ではない場所で始まっているという話になるわけです。

<スライド 24>

初期のブラフ積みの例は、横浜以外にもあります。幕末の慶応元（1865）年に横須賀製鉄所の建設が始まりますが、その時のお雇い外国人ティボディエの官舎の遺構が平成 15（2003）年に発見されました。建物の基礎は、石材の長手と小口を並べる積み方になっていましたが、言葉が一人歩きするといえますか、「いわゆるブラフ積み」という風に説明されており、横浜から離れた場所でもブラフ積みの言葉が使われています。ティボディエ邸の竣工は明治 3（1869）年頃ですから、掃部山公園よりもさらに古い事例です。

<スライド 25>

もう一つほぼ同時期の例として、新橋駅が挙げられます。鉄道開通は明治 5（1872）年ですが、駅舎は前年の明治 4（1871）年に完成しています。この駅のプラットフォームの基礎がブラフ積みと同じような積み方になっています。石は伊豆の斑石と言われていて、先ほどの横須賀製鉄所にしても房州石という記録があるわけではなく、むしろ相模あるいは伊豆の方ではないかと推定されていますが、やはり新橋駅のプラットフォームは「いわゆるブラフ積み」と説明されています。

面白いのは、新橋駅の場合、駅舎とプラットフォームとは積み方が違って、駅舎の基礎は煉瓦でいうイギリス積みに対応する積み方をしています。何らかの理由でその積み方の違いを選択したものと思われませんが、こうした今までにない洋風の石積みが明治の初めから現実に登場していることが、発掘調査でわかってきました。

<スライド 26>

これがどういうルートで国内に入って来たのかはわかりませんが、海外ではいろんなパターンの石積みがあることはある程度一般的であったようです。

例えば、この資料は西洋建築史の加藤耕一先生に教えていただいたのですが、19世紀初頭のフランス人建築家ジャン＝バティスト・ロンドレ（Jean-Baptiste Rondelet）が作った辞典を見ると、当時フランスではすでに石積みのパターンが体系化されていたことがわかります。ブラフ積みに相当する積み方も挙げられています。

これを直接先ほどの事例に結びつけることは早計ですが、石積みの様々な技術がヨーロッパにあって、それがどういう形かはわかりませんが、国内に入ってきた時に、おそらく意匠上の問題だけではなく、デザインと構造は必ず結びついているわけですから、総合的な判断で石積みの工法が選択されたのであろうと考えられます。

<スライド 27>

横浜に話を戻しますと、明治20年代の横浜ドック、真鶴の小松石を使った巨大な石造物ですが、やはり長手と小口を並べています。これも報告書には「いわゆるブラフ積み」と書かれているのですが、ルーツを辿ると横須賀のドック、明治4（1870）年の石造ドックと同じ積み方をしているわけで、横浜のドックについては、こうした技術体系のなかで捉える必要があると思います。

<スライド 28>

何を言いたいのかというと、ブラフ積みという言葉が一人歩きして大きく広がってしまっているなかで、元の山手の景観としての意味にもう一度立ち返って、いろんな事例を相対的に位置づけていけば、体系的に見えてくるものがあるのではないかと考えています。

<スライド 29>

ブラフ積みといえば、「横浜古壁ウォッチング」という有名なHPがあるのですが、そこで紹介されている写真の一枚です。明治の終わりに路面電車が路線を拡張したときのものですが、このときの拡張で山手にトンネルを掘って、本牧まで路線を延ばし、関外では新吉田川沿いに南へ向かって堀割川へといたる路線が開通します。その時の護岸工事の様子ですが、石工さんがいて石を積んでいます。これをよく見ると長短の連続になっていて、「いわゆるブラフ積み」になっています。

この写真のキャプションは旭橋となっていて、その上を路面電車が走っている写真もあるのですが、今の旭橋は大岡川沿いの日ノ出町のところにある橋で、当時路面電車はそんなところを走っていません。おそらく中村川を上って行って堀割川に入る辺りの小さな橋だと思います。

<スライド 30>

同じく倉木橋という橋の写真ですが、ここにも「いわゆるブラフ積み」が出てきます。

これはどう考えればいいのでしょうか。時代としては明治の終わりですから、ある程度デザイン化された石積みのあり方が、横浜のまちに分布していく過程と捉えられるのかもしれませんが。また「いわゆるブラフ積み」の特徴である長短の連続にしても、バリエーションがあったりしますので、こうした細かいところをもう少し丁寧に見ていくべきなのかなと思います。

<スライド 31、32>

先ほど見た堀割川などは関東大震災の後、布積みで護岸が改修されますが、例えば大岡川沿いでは、都橋商店街のところなど、震災後の新しいものだとは思いますが、ブラフ積みと共通する護岸が今も残っています。

そういう意味では、明治の山手だけではなくて、震災後の昭和の時代にまで視野を広げること、工法、材料などの観点から全体像が組み立てられるのではないかと。そうしてまた山手に戻ってきた時に、ではブラフ積みとはいったい何だったのか、そうした議論へと展開できるのではないかと考えています。

最後に、折角この場所をお借りしているわけですから、近代建築の様式と石との関係についてお話をさせていただきます。

明治・大正時代には新しい建築材料として赤煉瓦が普及するわけですが、各地で生産が始まって、それが流通するまでのタイムラグがあるので、赤煉瓦が一般に普及していくのはおよそ明治10～20年代です。それまでは近世以来流通していた木材、石材が洋風建築のベースになっていました。

<スライド 33>

その代表的なものが、先ほど基礎について紹介をした新橋駅や横浜駅です。新橋駅の場合は鉄道省文書から、房州石、伊豆石など各地の石が使用されていることがわかっています。外観の写真からは石造のように見えますが、実際は木造の骨組みがあって、その外装材として石が使われています。いわゆる木骨石造と呼ばれる構造です。

<スライド 34、35>

この駅舎の設計をした建築家のブリジェンスは、横浜ではそのほか横浜税関や横浜町会などを手がけていますが、いずれも木骨石造の建築です。これらは横浜における明治初期の代表的な洋風建築ですが、まずは外装材としての石を媒介として、建築様式が導入されたと言えます。

その後、明治中期以降の煉瓦造建築の普及とともに、煉瓦造独自の建築表現ができあがりますが、今日は石の話ですのでそこは飛ばしまして、こちらの横浜正金銀行の話に移ります。

<スライド 36>

明治37（1904）年に完成した横浜正金銀行、現在の神奈川県立歴史博物館の建物は、一見石造建築のように見えますが、実際の躯体は煉瓦できており、石材は外装材として使われています。ですので、外観に見られる建築様式は大きく進化していても、ベースとなる構造に石を張ってい

るという点では、先ほどの新橋駅と本質的には変わっていません。

今年の2月に、この博物館で石の展示がありました。建物の外壁に使われている湯河原産の白丁場石について、設計者の妻木頼黄をはじめ日本人建築家の第一世代が設計した洋風建築の外装材として使われていることが紹介されていました。横浜正金銀行の建物では、外壁には白丁場石だけではなく花崗岩も使われているのですが、白丁場石は花崗岩に比べてコスト的に高くつくということもあり、やがて外装材としては使われなくなっていくと思います。

代わって登場するのが花崗岩で、明治の終わりから国内では国会議事堂の建設に向けて、大蔵省が全国の石材調査を始めます。その調査報告書などを通じて各地の石材が知られるようになり、近代建築でいえば、宮村先生のご挨拶でも紹介されていた稲田産の花崗岩などが、外装材として普及していきます。その頂点が国会議事堂ということになるでしょう。

そして関東大震災ののち、煉瓦造の建築は鉄筋コンクリート構造にとって代わられるわけですが、横浜正金銀行のような煉瓦+石張りから、今度は鉄筋コンクリート+石張りという建物が登場することになります。

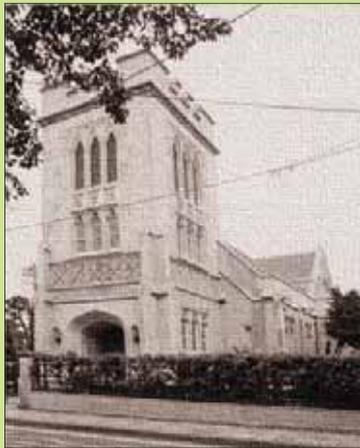
<スライド 37>

現存する昭和戦前期の建物で見ると、石の力を感じさせるのはおそらくこの三井住友銀行が一番だと思いますが、これは石造ではなく鉄筋コンクリートの躯体に石を張っています。笠井さんからの報告にあったように、これが施工上厳密に石張りと言えるものなのかどうかはわかりませんが、昭和戦前期にはこういう鉄筋コンクリートに石を張る建物が出てくるということで、やはり躯体+ α （アルファ）の外装材というかたちで、建築様式を表現する媒介として石材が機能しています。

<スライド 38、39、40、41>

こうして建築の表現を担ってきた石材は、その後、建築様式が無くなるとともに、具体的には、戦後のモダニズムの建築が広がるにつれて、外装材としての役割に終わりを告げると言っているのではないかと思います。

それが現代になってまた新たな展開を迎える、そういった話が後半のパネルディスカッションで伺えるのではと楽しみにしておりますが、まずは横浜のまちづくりのなかでの石のあり方について、簡単なご紹介させていただきました。どうもありがとうございました。



石の記憶 横浜の歴史的建造物と石

2016/7/16
横浜都市発展記念館 青木 祐介



2011年7月
(公財)横浜市ふるさと歴史財団
埋蔵文化財センター提供



横浜開港資料館所蔵



3



「横浜絵図面」(1865年) 横浜開港資料館所蔵



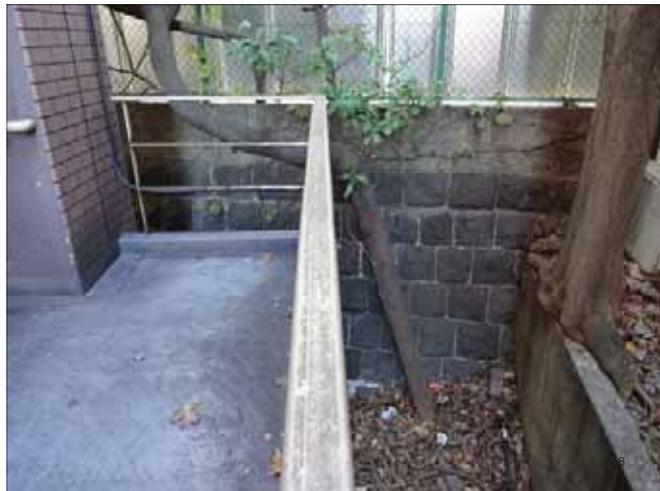
海岸通り 横浜開港資料館所蔵



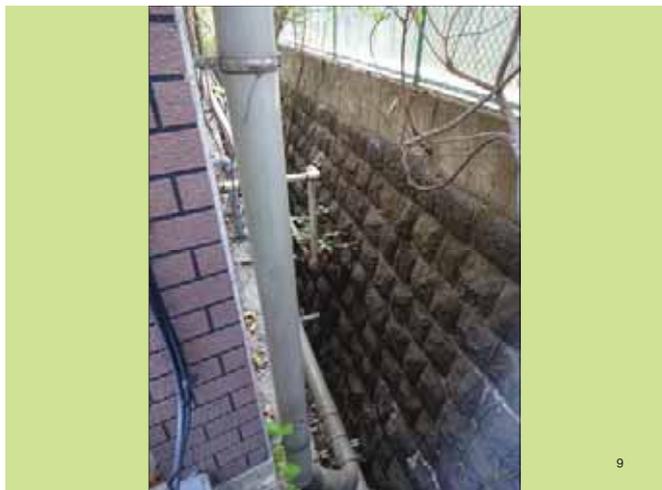
"The Far East" (1873.7.1) 横浜開港資料館所蔵



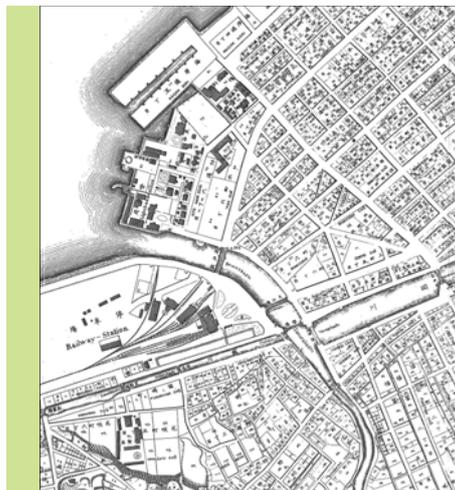
イギリス海軍物置所 横浜開港資料館所蔵



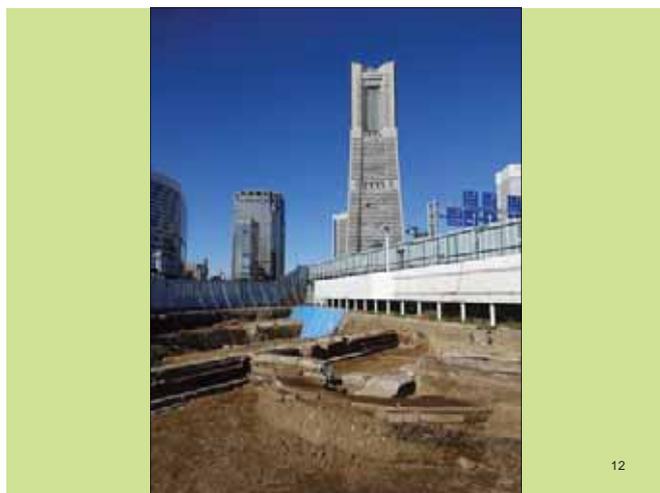
8



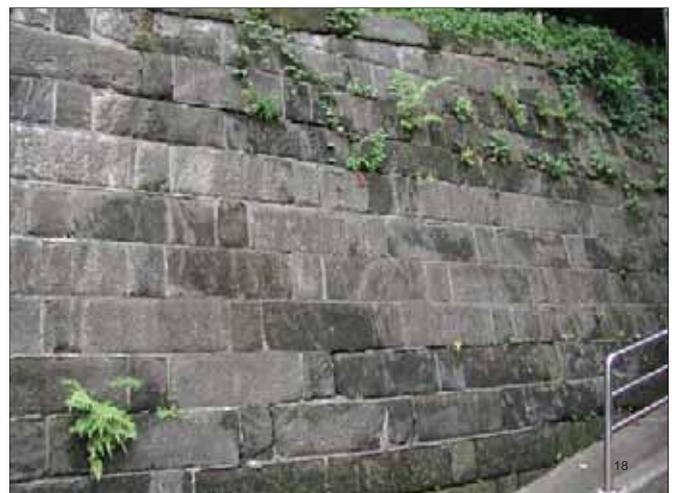
9



「横浜実測図」(1881年)
横浜都市発展記念館所蔵



12





19



イギリス海軍病院(明治初期) 横浜都市発展記念館所蔵
20



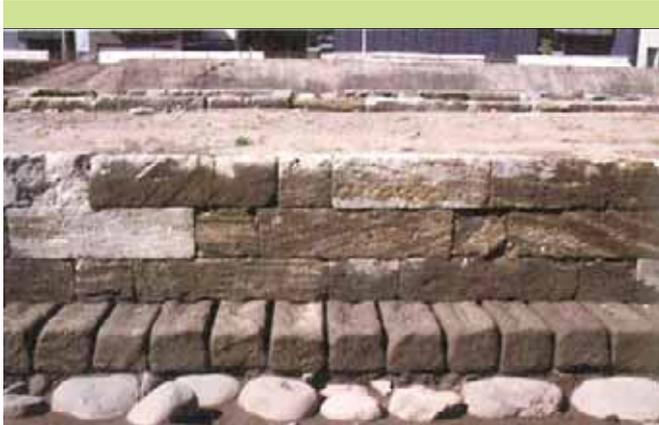
英海軍英手山遺構
イギリス海軍病院 横浜都市発展記念館所蔵



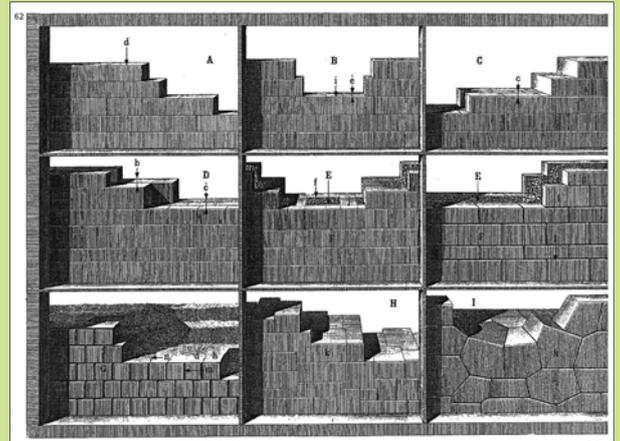
23



ティボディエ邸基礎 菊地勝広氏提供
24



新宿駅プラットホーム基礎
齊藤進『鉄道考古学事始』掲載



Jean-Baptiste Rondelet, "Traité théorique et pratique de l'art de bâtir" (1804) 26



27



旧横須賀製鉄所1号ドック 菊地勝広氏提供



『横浜電気鉄道新線写真帖』(1911年) 横浜市中央図書館所蔵

29



『横浜電気鉄道新線写真帖』(1911年) 横浜市中央図書館所蔵

30



"The Far East" (1872.10.16) 横浜開港資料館所蔵



"The Far East" (1874.1.1) 横浜開港資料館所蔵



"The Far East" (1874.8.31) 横浜開港資料館所蔵



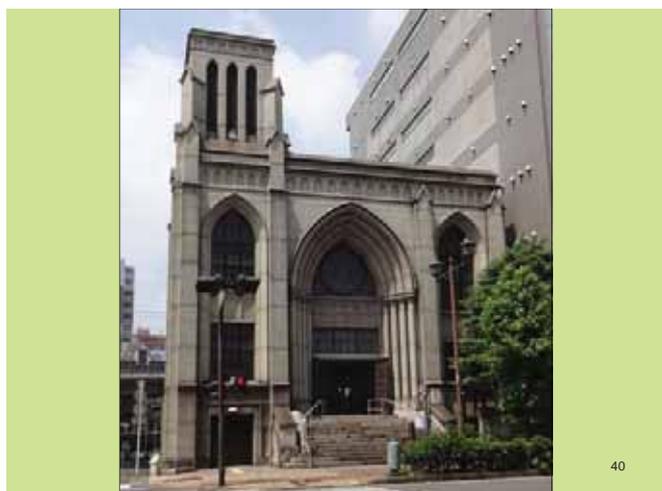
36



38



39



40



41

(6) パネルディスカッション

米山：これからパネルディスカッションを進めていきたいと思います。時間が1時間くらいしかありませんので、急ぎ足になると思いますが、これから「石がつなぐ歴史と文化」をテーマに進めていきたいと思います。

本日のゲスト、パネリストを紹介いたします。

まず安森亮雄（宇都宮大学准教授／大谷アカデミー学科指導長）さんです。

安森さんは宇都宮大学からお越しいただきました。本日は大谷石についていろいろお伺いします。

そして2番目、鈴木裕士（金谷美術館理事長）さんです（拍手）。

鈴木さんは東京湾の対面に金谷という房州石の産地がありますが、その金谷美術館の理事長です。金谷ストーンコミュニティ委員長もやられています。

それから木嶋房由記（木嶋房由記建築研究所代表／世界遺産アカデミー認定講師）さんです（拍手）。

木嶋さんは木嶋房由記建築研究所を主宰する建築家です。以前横須賀の景観フォーラムで房州石のことを熱く語っていたことに大変興味を持ちました。よろしくお祈いします（拍手）。

そして先ほど講演を賜りました青木先生にもコメンテーターとして参加していただきます。よろしくお祈いします（拍手）。

それでは始めさせていただきます。僕は今、元町から上ってきましたが、気象台のところは房州石ですね、その隣の住宅は大谷石ですね。歩いてみると色んな石があるのだなあ実感します。

それでは、まず安森さんからお話をお願い致します。

<大谷石とその取り組み>

<スライド1>

安森：宇都宮大学の安森です。よろしくお祈いします。今日は「大谷石とその取り組み」ということで、かいつまんでどういう取り組みをしているかをお話しさせていただきます。

<スライド2>

大谷石というのは、今日の会場の山手聖公会に使われていることから分かるように、気泡（有孔体）を含んでいる石です。軽石の凝灰岩で、柔らかく加工が容易で、重量が軽く、ミソといわれる茶色い斑点があるのが特徴です。これは火山灰が粘度化したものです。

<スライド3>

凝灰岩にはいろいろあり、少し緑がかっているものをグリーンタフと呼びますが、日本全国に広がっています。凝灰岩の間にはいろいろあります。

<スライド4>

これは宇都宮市の地図ですが、宇都宮駅から約7～8キロ北西にいったところに大谷町があり、ここで大谷石を採掘しています。

後ほど紹介する大谷石の集落は宇都宮市の北部にあり、農村集落で石蔵が残っているところや、大谷石と似た石でそれぞれの地名で呼ばれる石が採れた地区があります。

<スライド5>

先ほどの説明にもありましたが、採石場には、立坑と露天掘りがあり、現在4箇所ほど稼働しています。最盛期には200カ所以上あったと言われています。

<スライド6>

歴史的建造物としては、教会が幾つか残っています。

<スライド7>

まず、私たちの研究室とNPO法人大谷石研究会で、4年間共同で調査してきた大谷石の集落についてお話しします。石蔵は普通住宅の奥にあるもので、大事なものを仕舞っておくところですのであまり町並みとして現れてこないのですが、こういう農村集落とか石の産地へ行くと、石の町並みが残っています。

<スライド8>

左は、徳次郎と書いて「とくじら」というのですが、ここは徳次郎（とくじら）石が採れたので、こういう密集した町並みが残っています。他にも農村地帯で水路が非常に美しい上田（うわだ）町というところもあります。

この地図を見ると、緑でプロットしているところが石の建物ですが、約90棟ある建物のうち、60棟くらいが大谷石の建物で、かなり集中しています。

石の建物には、用途からみると、蔵が多いですが、納屋や、数は少ないですが住宅もあります。構法としては、積石と張石があります。

<スライド9>

これが張石の代表的なものでして、普通、石を積んでいきますと、目地が交互にレンガを積むような破れ目地になりますが、この目地を見ていただきますと縦に入っていて、木造の蔵に石を張ったということです。

蔵というのは耐火性を高めるために、江戸時代の後期に江戸で大火があったこともあり、板蔵を土蔵造りにしてその上に漆喰を塗ったりするのですが、北関東ではやはり地域の材料を使うということで、板蔵に石を張ることで蔵の耐久・防火性を高めるということから、石蔵が出てきました。また、この地域では石瓦を使っています。これは目の詰まった徳次郎石を使うことが多いのですが、凹凸がある形状の瓦を交互に組み合わせて並べています。

<スライド10>

石のテクスチャーにもいろいろありまして、昔はツルハシを使って手掘りしてその場で製品にしたのでツル目という斜めに目が入っているものをよく見かけます。昭和30年代に採掘方法が機械化されますので、チェーンソーを使った目になったりします。ビシャン仕上げなどより丁寧な仕上げも見られます。集落によってどのテクスチャーが多いかという特徴もあり、蔵が出来た時期にも関係していると考えられます。

<スライド11>

次に、私がこれまでに設計した大谷石を使った建築の事例について、簡単にご紹介します。いずれも、宇都宮大学のキャンパスにあります。

<スライド12>

宇都宮大学にはキャンパスが2つあるのですが、もともと宇都宮高等農林学校が発祥でして、こちらのキャンパスにはフランス式庭園が残っています。大正11(1922)年に開学した数年後に出来たものですが、この庭園の舗装にも大谷石が使われています。

<スライド13>

庭園に面した建物の改修設計を私の研究室で行いました。内部の改修もしているのですが、建物の外側には大谷石の縁側空間を造りました。庭園側の正面(ファサード)は建物の基壇に見えるようにしてあります。近づくと、大谷石の基壇状の腰壁が前後に雁行していて、笠木を兼ねたカウンターとベンチがあり、ランチなどができる憩いの空間となっています。大谷石のテクスチャーは、大理石のように冷たさを感じさせるものではなくて、少し温かさを感じさせますね。ですから家具的な場所にも使えます。つまり、ここでは、庭園の「風景」を造ることと、ヒューマンスケールの家具のような「居場所」を造ること、その両方の意味で大谷石が重要な役割を果たしています。また、フランス式庭園の奥には、やはり大谷石でできた大正時代の旧図書館の書庫が残ってしまっていて、この活用も進めていこうとしているところです。

<スライド14>

また、もう一つのキャンパスでは、私たちの建築学科の校舎の改修で大谷石を用いています。一つのコンセプトとして、建築を学ぶ学生が使うので校舎自体を教材にするという考え方をしています。エントランスの壁面に大谷石を使っていて、一段ずつ違う仕上げになっています。地域のシンボルということとともに、大谷石の教材であり大きなサンプルとして見せています。

<スライド15>

また、この校舎の近くに、学生とセルフビルドで大谷石を使った小さな休憩所を造りました。

<スライド16>

東日本大震災の時に栃木県では、大谷石のがれきもかなり出ました。それを再利用(リサイクル)しています。古い石は比較的質の良いものが多いので、そのまま砕いて道路に敷くというにはもったいないことがあります。震災の時だけではなく、現在も所有者の世代交代などで石蔵や石塀が解体されることがあるので、大谷石の廃材のリサイクルというのはひとつの課題です。

<スライド17>

ここからは、私も関わっている大谷アカデミーの紹介をしたいと思います。大谷石の技術者の継承を目的に、平成26(2014)年から活動を始めました。文化庁の「文化遺産を活かした地域活性化事業」の助成をいただいています。石工さんの高齢化や、この教会のように古い建物をどうやって修復していくか、次世代にどう継承していくかということが背景にあります。

<スライド 18、19>

私は学科を担当していて、初年度は毎週火曜日の夜に大谷地区の公民館に集まって講義をしました。隔週の日曜日には実技の授業があり、現在の帝国ホテルのロビーの大谷石のレリーフを復原された石工の渡辺哲夫さんを中心に指導しています。1期生11名、次年度には継続と新規を合わせて6名が参加し、今年度もステップアップした実技の指導を行っています。一般の方対象にも短期集中講座を実施しています。

<スライド 20、21>

学科の講義では、大谷の歴史や、大谷石の構法・材料など、演習では平面構成や立体構成、帝国ホテルのレリーフをトレースして自分なりに分析し考えてみるなどをやり、また見学会では、帝国ホテルなど具体的に大谷石を使っているところに行きました。

<スライド 22>

実技では、最初は掘るところから始まって、自分の干支を彫ってみるということをやリ、次年度になると機械加工についても学びました。

<スライド 23>

半年経つとこれくらいのもので出来るようになり、これは、各自の干支を彫ったものを発表会の時に並べたものです。

<スライド 24>

昨年度は、大谷アカデミーの一つの役割として新しい大谷石のデザインを提案しようということで、新しい石堀の提案に取り組みました。1尺×3尺の大谷石の一般的なサイズを斜めにカットして組み直して製作したものです。大谷石のリサイクルを考えるということにも繋がると思います。

また、近年は、宇都宮市の様々な団体が大谷石のことに関わって、盛り上がりを見せています。それをご紹介したいと思います。

<スライド 25>

今日の資料としても配られた中心市街地の大谷石の地図(石の街 うつのみや 遺産と景観)は、「NPO 法人宇都宮まちづくり推進機構」により発行されています。「歴史的建物活用特別委員会」を中心に、石蔵のマッチング活動や、空いている石蔵で1日だけコンサートやシンポジウムを行う石蔵フォーラムなど、継続的に取り組んでいます。また「栃木県建築士会宇都宮支部」でも、大谷石の蔵がどれくらい残っているのかという調査を10年以上前からして、それがこういう地図にも生かされています。

<スライド 26>

「NPO 法人 大谷石研究会」では、「大谷石百選」という本を発行しています。また、私の研究室と一緒に石蔵集落の調査をしたり、バスツアー、シンポジウムなどを開催し、大谷地区の観光マップを作ったりしています。

<スライド 27>

また「宇都宮美術館」では、昨年度は「大谷石をめぐる連続美術講座」という大谷石に関する講座が開かれました。また、来年1月からは「石の街うつのみや 大谷石をめぐる近代建築と地域文化」という企画展も開催予定です。

<スライド 28>

最近の取組みでは、「LLP チイキカチ計画」により「OHYA UNDERGROUND」という採掘跡地で地底湖ツアーが行われていて、結構な人気になっています。

<スライド 29>

そして「宇都宮市役所」の各部署でも様々な取組みがあります。都市計画課の都市景観グループによる「宇都宮市まちなみ景観賞」などの景観の取組み、建築指導課は宇都宮大学との共同研究で大谷石建造物の補強方法やより簡便な修復方法等の検討、教育委員会文化課では文化遺産や「日本遺産」に向けた取組み、また産業政策課は地下空間の活用による地域振興（イチゴ栽培など）など、いろいろな取組みがなされています。

以上、ご報告させていただきました。

米山：ありがとうございました。宇都宮の活動が良く分かりました。

結構若い人も活動していますね。若い人はそのまま石工になるという方はいるのですか？

安森：大谷アカデミーを修了した後に、石材会社に転職した方もいます。

米山：楽しみです。それが一番だと思いますね。また後でお願いします。

今度は栃木県の大谷石から千葉の房州石の方へ移りたいと思います。鈴木裕士さんお願いします。

<房州石の今と昔>

<スライド 1、2>

鈴木：房州石は、千葉県金谷が産地になります。行政でいうと富津市になりますが、神奈川県からだと久里浜からフェリーがでていて、その着いた先が金谷です。そこに鋸山という山があり、そこがかつて房州石の産地だったところです。

いま安森先生が話された大谷石は現在も4件の石屋さんが営業し今でも石を切り出しているそうですが、鋸山の房州石の場合、採掘は既に終わっています。

石が切り出され始めたのは江戸初期といわれているのですが、約200年間鋸山から石が切り出され、昭和60（1985）年を最後に終焉しました。

実は私の父は、最後まで石を切り出していた石屋だったということもあり、房州石を後世にお伝えする作業、あるいは鋸山から石を切り出したという文化とか歴史を皆さんにお伝えし、そういうことでまちの活性化を図ろうと活動しています。

<スライド 3>

鋸山から横浜はよく見えます。直線距離で約 20 キロ少しだと思いますが、横浜から鋸山があれだというふうに見る方は少ないと思います。

こちらが鋸山の山頂から見た金谷の街です。金谷は、実は人口が 1,500 人しかいません。富津市全体で 45,000 人くらいですが、少子高齢化という問題を抱えている地域です。その中で鋸山の房州石という石を広めることは、やはり地域の歴史文化、小さいながらも鋸山を中心とした観光が金谷の基盤産業ですから、こういった観光にも繋げていながら何とか地域を元気にしていきたいということで、鋸山を皆さんに PR 活動をさせていただいております。

先ほど大谷石の話がありましたが、大谷石は露天掘り、立坑という地下に掘り進むということが特徴かと思いますが、鋸山の場合は山の山頂部分から石を切り出します。山は 329 メートルで、それほど高い山ではありませんが、山の上の部分から切り出しますので、当然切り出した後の下ろす作業が非常に大変なんですね。ですから鋸山の石の勉強をするということは、日本の石材の切り出し方、あるいは運搬の仕方など、全てこの山を見れば分かるといわれています。

現在、鋸山の石の研究調査に協力いただいている方は、山梨県教育長の宮崎さんや石川県金沢城の富田さんたちです。そういう方たちの協力をいただきながら研究を進めています。

<スライド4>

金谷は小さい街ですが、このように石の風景が残っています。ただ昭和 60 (1985) 年に石切りが終わったと申しましたが、徐々にこの金谷から石の風景が消えています。というのは、補修などに大きな経費が掛かるし、直したくても石自体が無いという問題がありまして、私たちはこの石の風景を何とか残したいという思いはあるのですが、現実に生活をしている皆さんの中で、少しずつそういった意思が無くなってきているのが現状です。

<スライド5>

鋸山の房州石の最盛期は幕末から明治、大正にかけてということが言われています。先ほどこの周辺にも房州石のいろいろな遺跡が残っているという話がありましたが、日本の近代化にこの房州石が盛んに使われていて、横浜の開港とか東京のお台場にも、皇居の造営にも房州石が使われています。そういった意味でも明治から大正にかけて沢山の石が使われ、最盛期には年間で 56 万本、この山から石が切り出されたといわれています。

<スライド6>

最盛期には金谷町だけで 30 軒ほどの石屋さんがあって、なおかつ町の 80 パーセントの方が何らかの形で石に携わる仕事で生活が成り立っていたといわれ、山の中に石の町があった時代があったそうです。

<スライド7>

これは鋸山の明治の頃の写真で、白く見えるところが石を切り出した切り滓です。明治時代に正岡子規が金谷を訪れた時、「この山は 100 年後には無くなってしまふぞ!」という言葉を残していったそうですが、それぐらい盛んだったということですね。

<スライド8>

実はこの写真は今の鋸山のどの部分かは分かりません。というのは、切り出している最中ですし、山の中がどんどん変わっていってしまうので特定できない状況です。それだけ山の形が変わっているということです。

<スライド9>

切り出された石はこういった舟で、大正時代はトロッコを使って港まで運び、港から舟で横浜や東京に運ぶわけです。

<スライド10>

こちらは昭和40年代の金谷の写真ですが、一つの転機となったのは関東大震災で30軒ほどあった石の元締めが引っ越したため、これが転機となり、やはりこういう山頂から石を切り出す大変さなどから、確か大谷石は昭和初めが最盛期と聞いているのですが、かつては大谷石の隆盛とともに房州石が徐々に衰退していったと。因に大谷石も房州石も凝灰岩に分類されますが、房州石は凝灰岩の砂岩ということで、砂の質が多いんです。大谷石は分からないのですが、そうした違いがあります。

<スライド11>

金谷は昭和24(1949)年に金谷村から町に合併した時は3,000人近くいたのですが、今は1,500人しかいません。

<スライド12、13>

そんな中で昭和60(1985)年に採掘自体が終了したのですが、こういったかつて石で栄えた町でこういったものを皆さんにアピールしながらやっていこうということで、石場でこのようなコンサートをやったり、石を使ったモニュメントですが、石を使った彫刻などを小さい町のあちこちに配置して、観光で来た方に楽しんでいただいたりしています。

<スライド14、15>

あとは、大谷石は火に強いという話があったのですが、房州石も火に強いわけです。かつて大正時代は房州石で作られたパン焼窯が非常に人気があったらしく、そういうことが話として残っていますが、こちらは房州石で造った石窯を作って、それでピザとかパンを焼いたりして、そういう体験をすることで町内の観光の浮揚に繋がっていけないかということで、こうした試みをやっています。

<スライド16>

あとは石のシンポジウムを行ってしまして、今年も11月19日に開催させていただくのですが、今年第6回を迎えることになります。これは先ほど研究でお世話になっている山梨県の宮崎さんや石川県の富田さんなどを呼んで、鋸山の石切り場の遺構は素晴らしいものだと、1カ所でこれだけのスケールで残っているのは日本では最大級であると、だから石の研究者を金谷に集めていただいて石の調査の発表や全国の事例を発表していただくことを考えたらどうかという提案があり、それを計画しております。

<スライド 17>

それから希望者に対してですが、鋸山の見学ツアーなどもやらせていただいたりしました。

<スライド 18>

後は石切りが終了したため石が手に入らないのでどうしたらいいのかということで考えているのですが、先ほど石の風景が無くなると話をしましたが、貴重な房州石の石塀がどんどん新築に変わって行って壊されてしまうわけですね。こうした家を壊した時の話をすると、石を貰いに行っています。

<スライド 19>

これは里帰りプロジェクトということでお話をしているのですが、この写真は神奈川県の逗子にある別荘のお宅の石塀が壊されるという話を聞き、100 本近くのきれいな房州石が廃棄されるということを知り、取りに来れば提供するという話を言われたので、その時の写真です。

ということで、房州石は採掘ができませんので、貴重な資源として確保なども行っております。

現在、こういった取り組みをしながら、房州石を使ったご縁で、最近の新しいプロジェクトとしては埼玉県の草加、実は草加煎餅を焼く炉が房州石を使っているんですね。その草加のまちづくりをやっている皆さんと草加煎餅を使ってプロジェクトを起こせないかということで、こちらはその後お話をして下さる木嶋さんが全て橋渡しをしてくれましたのですが、木嶋さんは隣の部屋にあるパネルを展示され、木嶋さんが足で各地に房州石の残っている場所等の調査をし、いろんなところと石を通じたご縁で、そういった交流の中から新たな活性に繋がることのできるのではないかということでいろいろやらせていただいております。

私どもは民間の有志で立ち上げこのような発表をさせていただいているのですが、このような活動は出来れば行政を動かしていきながら、大きな活動に出来るように、またそれが地域の活性に結びつくように頑張っていきたいと思っています。

最後に、このような活動の中で、その活動の評価が認められ、昨年度まで3年間、JR 財団から鋸山の石切の遺構が文化遺産として価値があるという評価をいただき、鋸山の自然の復興、その石切り場の跡に助成事業をいただきました。3年間で約 400 万円の助成をいただきました。そういったいろんな方々からの資金的なご支援をいただき、あるいは専門家の方々の調査活動のご協力をいただいたりしています。以上で私の話は終わりたいと思います。ありがとうございました。

米山：ありがとうございました。鋸山からはもう採れないんですね。

鈴木：そうですね、もう切り出せません。

米山：いまある資源を大事にしていかなければなりませんね。逗子の別荘の話も面白いですね。また後程お話を伺います。

それでは木嶋房由記さんをお願いします。木嶋さんはいまお話にありましたように、全国の房州石の調査をされているエキスパートです。よろしくお願いします。

<妄想と実践>

木嶋：木嶋です。よろしくお願いします。今日は金谷の鈴木さんが来ていますので、私からの話は何も無いと言ったのですが、話をしなければいけないということで、房州石の話は、本家本元におまかせして、私は、別の視点からの話をしようと思います。

<スライド1>

「忘れられた遺伝子の潜在する力：妄想と実践」。私の妄想と石を活用した町づくりの実践の話をして。

<スライド2>

これは船頭と参謀と旅人、真ん中は船頭の鈴木さん、左は鈴木さんの奥さん、名参謀です。右は旅人の私です。旅人は、町には責任が無いので好きな事を言って、面白くなければ引き上げる、という関係の3人です。

<スライド3>

これはゲリラシンポジウムを行なっている風景です。正面には一緒に活動している一柳さんが座っています。ゲリラシンポジウムは、話を聞いてくれる方がいたらそこへ乗り込んでいき、ガンガン話をするというものです。話の内容は、歴史的建造物の貴重性などの話をして、価値の認識をして頂いて、都市開発等でむやみに壊されないように先手を打って話をします。

<スライド4>

活動の内容です。妄想を実現に繋げて、いかに現実に近づけるかという活動です。妄想は四つです。一つ目は、「町づくりのプロトタイプ構想」（町づくりのものさし創り）町づくりの実践です。二つ目は、「石造文化の世界遺産構想」（地域の御旗創り）地域活性化の切り札です。三つ目は、「石造の防災構想」（みてみぬからの診る）地域の不安を解消する。四つ目は、「文化メタボリズム構想」（狩猟型2ch思考）地域間の文化的刺激を与える。妄想なので、わけのわからない言葉が出てきます。一つ目の町づくりのプロトタイプ構想の中の町づくりのプロセスは、「気付く」「歩く」「活用する」「伝える」の4つに大きく分けられます。「気付く」は、町の宝に気付く、その町のオリジナルの地域資源に気付く事です。「歩く」は、徹底的に歩き倒します。町の基礎調査です。それを基礎として、「活用する」、町のアンカー創りです。町のアンカー創りは、大きく分けて2つに分かれます。「物語性の再生」と「地域間交流の再生」です。この二つを、地道に積み重ねて行けば、世界遺産の布石に繋がると思っています。そして、武器を持ったら「伝える」仕掛ける事です。町中はもちろん、外へ仕掛ける事です。小さな町は、オンリーワンの町づくりを目指さなければなりません。それを目指さなければやる必要が有りません。此の様な事が、私の妄想と実践の活動内容です。

<スライド5>

ここでは、私がモノを考えたりデザインしたりすることの一つの手法で、“二つに分ける事”の話をして。これは、横浜に建つ石蔵です。石蔵は二つの知識を得ないと読めません、建築の知識と石の知識です。片方の知識だけでは石蔵は読めません。建築の世界は石のことをあまり知

らない、石の世界は建築のことをあまり知りません。その時に建築の世界の中に入って行って石の話をする、石の世界の中に入って行って建築の話をする。そうすると、刺激、意外性、ギャップなど、相乗効果が生まれ様々な可能性が出てきます。町や地域でも“二つに分ける事”が出来ます。いま始めていることは、日本の文化の中心の紀伊半島と少し文化が疲弊している東北にそれぞれ拠点置いて、二つの拠点を移動する。二つの間を移動すると、文化的に刺激され、そこで相乗効果が生まれます。これが文化メタボリズム（造語）です。これは最後に話をしたいと思えます。

<スライド6>

一つ目の妄想の「町づくりのプロトタイプ構想」の中の(2)歩く。徹底的に歩き倒す話です。

<スライド7、8>

東京湾、相模湾、駿河湾周辺から伊豆半島にかけての「石造文化」の徹底的な基礎調査です。廃墟、残骸を含めて2,000カ所くらい凝灰岩系建造物が点在しているということが分かってきました。これはパネルに入れ込んだものですが、一つ一つ先人の心、知恵が入っています。

<スライド9>

(3)活用する。これは先ほども話しましたが、物語性の再生を行い、地域間交流の再生をすることで世界遺産の布石にならないだろうか、という話です。

<スライド10>

これは龍神さんです。写真は左側が日本寺の和尚で、真ん中が鈴木さん、右が私です。天井に龍の絵がありますが、これは平山郁夫さんのお弟子さんの日本画家が書いたもので、建築は、

いかるがこうしゃ

鵜工舎が請け負っています。龍というのは神様を守るといわれていまして、山頂に、1,500羅漢などの神様を包み込む鋸山は、まさしく鋸山自体が龍そのものです。ノコギリに似ているから鋸山だと言われていますが、私には、鋸山が龍の背中に見えています。そういう忘れられた物語を探し地域の再生に繋げようという話です。物語性の再生です。

<スライド11>

先ほど鈴木さんから出ましたが、これは草加煎餅を焼く火鉢です。東京湾では舟運による地域間交流が盛んに行われていたのですが、今は全く行なわれていません。そこで房州石造の火鉢を介して草加と金谷が交流を始めているということです。

<スライド12>

これも地域間交流の一環です。綾瀬川のゴミを清掃する活動です。カヌーでゴミを拾うわけです。この近くに草加宿に物資を荷揚げした札場河岸跡があります。房州石も運ばれました。先日、一柳さんとカヌー体験をしてきました。

<スライド13>

これはフィンランド大使館の石垣です。東京では最大級のもので、これは大変貴重で、房州石を荷出しする時に、どこの石問屋が採石したか解る様に、石の小端に、商標と言って刻印を彫

ります。この石垣には、3種類ほど現存しています。その中に一本線の印が在るのですが、これは鈴木さんの家の屋号、芳家石店の商標です。この様な石垣も都市開発ですぐ壊される可能性があります。先ほど言ったゲリラシンポジウムを仕掛けて、世界遺産に繋がる石垣だという話をして行こうと考えています。この石垣の歴史的価値を認知させる事が大切だと思っています。

<スライド14>

二つ目の妄想の「石造文化の世界遺産構想」の話です。石造文化を世界遺産にするんだと言っても、世界遺産の基礎知識が無ければどうにも成りません。世界遺産ってどの様なもので、どの様な仕組みなのか、基礎知識を勉強した訳です。それで世界遺産アカデミーの認定講師になったということです。

<スライド15>

これは世界遺産の登録の流れです。黄色い枠の真ん中に暫定リストとありますが、この暫定リストに載ってはじめてスタートラインに付けるわけです。これに載るには住民の大変な努力と理解がいるということです。

<スライド16>

これは世界遺産に成るための必要条件です。世界遺産5条件の5番目「遺産が保有国の法律で保護されていること」とありますが、これは史跡、文化財指定、国宝等のことです。これは先ほど2,000カ所見つけたと言いましたが、その中には、ほとんどこの条件にあたる史跡等が含まれていません。

<スライド17、18、19>

これは日本の世界遺産です。今度コルビュジエの美術館が世界遺産登録になりましたので20カ所、先ほどの暫定リスト記載物件が10カ所、これは暫定リスト記載候補資産ですが、これが27カ所、そうすると今エントリーしていないということは40～50番目ということになります。

<スライド20、21>

石造文化の世界遺産への可能性は、今のままでは、99%不可能です。残りの1%は何かというと、先ほど指摘したように、出来るところから布石を打つ、物語性の再生、地域間交流の再生、基礎知識の習得、住民の奇をてらわない地道な努力が世界遺産に繋がる、これは今後の話です。

<スライド22、23>

三つ目の妄想の「石造の防災構想」の話です。石造は、基本的には、構造上建築基準法から適合されていません。左の写真は、崩壊危険区域の看板が立っています。これが本当に崩壊するのか、安全か危険かの根拠を示す必要が有ると思います。危険であれば、その解決方法を示して、それを地域に働きかけて、地域の不安を解消する事が重要だと思います。看板だけ建てても、何の解決にも成りません。現実に凝灰岩造構造物は横浜市内に多く点在しています。震災が何時起こってもおかしく無い状態で、見て見ぬ振りで放置では無く、出来る事から行動に移す事が重要です。検討するべきです。先ほど青木さんからもお話が出ました西区の掃部山公園の石垣ですが、これは一度解体して復原したものです。これはいい参考になると思います。

<スライド24>

最後に、四つ目の妄想の「文化メタボリズム構想」の話です。形の限界、新陳代謝しないメタボリズム。文化のメタボリズムは新陳代謝すると。

<スライド25>

イメージとしては、フランク・ロイド・ライトの二つの拠点。タリアセン・イースト(ウィスコンシン州)とタリアセン・ウェスト(アリゾナ州の砂漠)です。毎年2回キャラヴァンを組み、ウィスコンシン州とアリゾナ州の間の大移動を繰り返しました。私が今考えている事は、日本の文化の中心である紀伊半島と少し文化が疲弊している東北にそれぞれ拠点を作って、そこを移動します。二つの間を移動すると、地域間交流が行なわれ、二つの地域が文化的に刺激され、相乗効果が生まれ文化の新陳代謝が起こります。文化メタボリズムです。言葉にならないもの、形ではないもの、お金に換えられないもの、それらを有機的に増殖させたいということを皆さんに申しあげて終わります。

<スライド26>

米山：ありがとうございました。いろいろな調査をされて、妄想と実践でしたか、何でも実践しなければダメですね。考えているだけではなくて守るなら守る、調査するならするで、大変エネルギーギッシュなお話で是非展開をしていきたいと思います。よろしくお願いします。ありがとうございました。

時間がないようですので質問をお受けしたいと思います。質問を介してお話を進めて行きたいと思いますので、是非ご協力下さい。よろしくお願いします。

質問者A：大谷石はなぜ大谷地域にあるのでしょうか？ 大谷石は那須火山帯の噴火物だと思うのですが、大谷町に固まっている印象なんですね。なぜそこにできたのか、その理由を伺いたい。また付近にそういうものがあるのかも伺いたい。

安森：火山灰の堆積が隆起してきたところが凝灰岩の採れるところなんです。大谷は地形上、地表面に近いところから出てきているので、採掘し易いという面があったのではないかと思います。それから、福島の方へ行くと似たような石で、芦野石や白河石もありますし、凝灰岩の分布は広がりがあると思います。

米山：私から質問してよろしいですか？

大谷石の採掘や細工をしていくには、技術者が必要だと思うのですが、茅葺き民家でも屋根を葺く若手の職人の養成が課題ですが、大谷にはそれを支える若手はいるのでしょうか？

安森：その技術者の継承というのは一番懸念されることですが、技術がすぐに廃れるということではなくて、まだまだ現役の方達がいて大丈夫ですが、それぞれ繋がっていかねばいけないということは思っています。

米山：ありがとうございます。それから鈴木さん、鋸山の石はもう採れないということですが、積み方ですとか加工の仕方などの技術は傳承されているのですか？

鈴木：それも切り方はもう終わっているのですが、積み方ということで、町内でかつて石を積んだ方がいまして、私はその方とおつきあいがあるのですが、それと同じことが今の若い方にできるかという、その機会がないのが現状ですね。

米山：先ほど逗子の別荘に石を貰いにいったという話がありましたが、その時に石を取り外すのにも技術が必要なのではないですか？

鈴木：あれは石にモルタルの目地を使っているものですから、そこを切り離せば取れますので、そんなに技術云々はいらんと思いますが、対象物が建築物とか文化財になると残していくのは大変だと思いますね。

米山：木嶋さん、いろいろな写真等を見せていただいて全国の調査をされているのですが、房州石でもいろんな積み方使われ方があったりしますが、その辺り歴史的に見てどういう見解をお持ちですか？

木嶋：そこまで詳細な調査というか、そういうふうには見ていませんが、どこに何があるか、どういう状態であるかということを見たわけです。

米山：どなたかご質問があれば、いかがでしょうか。

質問者B：先ほど逗子の別荘からいただいてきた房州石のリサイクルはどうお考えですか？私は宇都宮から来たのですが、われわれ宇都宮でも東日本大震災がれきの大谷石を休憩所としてリサイクル活用したり、また町の中に塀がたくさんありますが、それが壊されるという問題などで大谷石の残滓が出ます。しかしその中にも良質なものがありますので、それをどう生かしていけばいいのか悩んでおります。そういった意味でも問題提起となりますので、参考にさせていただきたいと思います。

鈴木：具体的な事例という、千葉市に千葉中央博物館がありますが、そこに展示の協力させていただいています。もう一つは、逗子のお宅の家が房州石の中でも高級といわれる桜目という、石の中に桜の花びらが散ったようなピンクや白い模様が入っている肌の石で最高級といわれるのですが、そういう高級な石を使った塀だったものですから、彫刻家から素材依頼の要請があったりします。

あとは貴重な石ですから簡単には渡せませんが、房州石を残していく記念碑的なものになるのなら提供したいと考えております。

米山：どなたかご質問ございませんか？

質問者C：私、母方の実家が大正時代から石材店をやっているんですけど、私も若い頃から石の文化に興味を持ちまして、大谷にも今のようにおしゃれになっていない時に大谷の資料館とか真鶴とか稲田とかあちこちに行きましたが、今日も皆さんのお話を伺って当時を思い出しながら聞いておりました。石の文化は、例えば熊本城で穴太衆が造った立派な石垣だといろいろ言われていますが、こういう文化は日本にも土台としてあったと思うのですが、今日お話しを伺いたいのは、横

浜で幕末から西洋の技術が入ってきた時に、こういう土木系の擁壁とか護岸とかに石材が多く使われてきたけれども、洋風建築では外装材として石の使用が限定されていたように思えるのですが、日本で石組みの石造の建築というのはあったのでしょうか？ いわゆる石張りではなく、純粋に石造建築といわれるものの事例が横浜であったのでしょうか？ そういう事例があれば教えていただきたいのですが。

青木：建築と石ということでは、本当はインテリアとしての石を無視することはできませんが、内装材まで含めると話が広がりすぎるので、今日は、外装材としての話に限定しました。

横浜で純粋な石造建築があったかどうかは、はっきりとはわかりません（注：国内に現存するものでは鹿児島尚古集成館がある）。遺構が残っていない以上、写真だけでは木骨石造との区別がつかないからです。おそらく居留地時代の初期は木骨石造が中心だったと思いますが。

木造ないし木骨石造の時代から、次に組積造として煉瓦造の時代が来るわけですが、横浜に限らず、たとえば辰野金吾の日本銀行本店なども躯体は煉瓦で、外装材として石を使用しています。純粋な石造というのは、なかなか無いかと思います。

大きな流れとしては、近世以来の石工の世界、護岸などの土木構造物の世界に加えて、新たに洋風建築の世界に石が取り込まれるときに、外装材として様式を表現する媒介となったという風に捉えています。

米山：では木嶋さんに伺います。先ほど世界遺産の話が展開されましたが、房州石が全国どの辺りまで行っていて、それがネットワークとして世界遺産まで結びつけられるか、可能性はどうですか？

木嶋：房州石だけというわけではありませんで、伊豆半島周辺にかけて、伊豆石は伊勢の河崎にまで行っています。北は房州石でいうと、栃木の足利あたりまであります。だから東京湾周辺から伊豆半島までの話ですね。

米山：房州石だけではなくいろいろな石を含めて石の文化、石造文化であるということですね。日本の石造文化であるということですね。

木嶋：そうですね。

米山：まさしく今日のテーマ、妄想ですね。

木嶋：そうです、妄想です。

米山：何かご質問ありませんか？

では感想を踏まえて青木先生、お話をお願いします。

青木：皆様のお話を非常に興味深く聞かせていただきました。もっとじっくりお話をいただきたいと思うものばかりでしたが、消費地である横浜の視点でいえば、大谷石であれ、房州石であれ、どういった経緯、ルートで持ち込まれてきたのか、そういったことをもっと深く調べていく必要があると思いました。

また鈴木さんのご報告のなかで里帰りプロジェクトというのが出てきましたが、これなどまさ

に木嶋さんの言われた「石を介した地域間交流」につながっていく話です。この山手地区でもずいぶん石積み擁壁が無くなってきていますが、じゃあ壊すから博物館で貰ってくれといわれても如何ともしがたいわけです。そういうなかで生産地と消費地の関係をもとに学術研究を含めた様々な交流を進めていく、今回のシンポジウムがそのきっかけになれば大変有意義ではないかと思えます。

米山：最後に、パネラーの皆さん、将来に向けて石造文化を発展させ、継承していくためのアドバイスを一言ずつお願いします。

安森：大変面白く聞かせていただきました。消費地としての横浜、生産地としての大谷、その関係性が見えてきたことが面白くて、これからは知りたいことが沢山出てくるなと思いました。ますます建築文化をもう少し探究していきたいと思いましたし、未来へという意味では地域の景観なり地域の素材は重要になってきているので、その分連携も含めてやっていければいいなと思っています。

鈴木：日本は木の文化といわれていますが、木は腐りますし、残していくのは非常に難しいと思うのですが、そんな中で石も使われている。石はなかなか劣化しにくいので、町内にある鋸山は石を切った景観が非常に象徴的な山としていま人気が上がつつあるのですが、そういった人間の営みの痕跡を何らかの形で残していくことが、今後については大切ではないかと思っていますので、古いものばかり残せばいいというわけではありませんが、残すべきものは残していかなければいけないと考えています。

木嶋：先ほど地域間交流ということが出ましたが、もう一つは物語性。これは草加煎餅の話が出ましたが、草加に残っているいろんな人やモノを繋ぐ物語を顕在化して町づくりに生かしていくということが大事ではないかと思っています。

米山：まちづくりや観光、物語性などという言葉が出ましたが、私もいろいろな町を旅していると、石がいろいろなところにあって、面白いと思ったのは佐渡・宿根木の重要伝統的建造物群保存地区にある石橋が御影石であったり、福井へ行って笏谷石があったら、出雲崎に行っても民家の土台が笏谷石だったりしていて、それを辿っていくと舟運が見えてきたり、北前船が出てきたり、いろいろな人の顔が浮かぶわけですが、木嶋さんがおっしゃった物語性が出てきますね。ですから歴史文化を石が繋ぐと言いますが、僕たちの生活文化を繋いでいるのではないかという感じがします。今日の私たちの周り、この建物も大谷石ですね。町の中からだんだん石が無くなっていくと青木さんはおっしゃっていましたが、まだまだよくよく探すと残っていますね。これは宝ですよ。そんな感じがしますので、今日のこのセミナーを介して、足下をもう一度見つめ直して、石に光を当てていただきたいと思います。

大谷石とその取り組み

安森亮雄 (宇都宮大学)
YASUMORI Akio

2016.7.16 歴史を活かしたまちづくりセミナー「石の記憶」
横浜歴史資産調査会 / 横浜市都市整備局

1

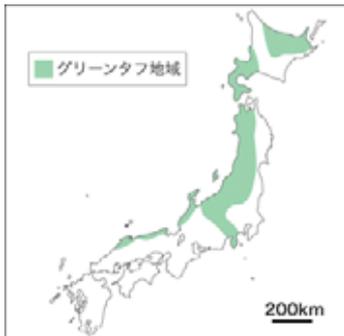
大谷石(おおやいし): 軽石凝灰岩
宇都宮市大谷町周辺で産出

- ・耐火性に優れている
- ・柔らかく、加工が容易
- ・重量が軽い
- ・ミソ 軽石が粘土化したもの



2

グリーンタフの分布と各地の石材



各地の石材

- ◆ 秋田県 十和田石
- ◆ 山形県 高島石
- ◆ 福井県 笏谷石
- ◆ 静岡県 伊豆石
- ◆ 島根県 福光石

おおだwebミュージアムより転載



4



立坑



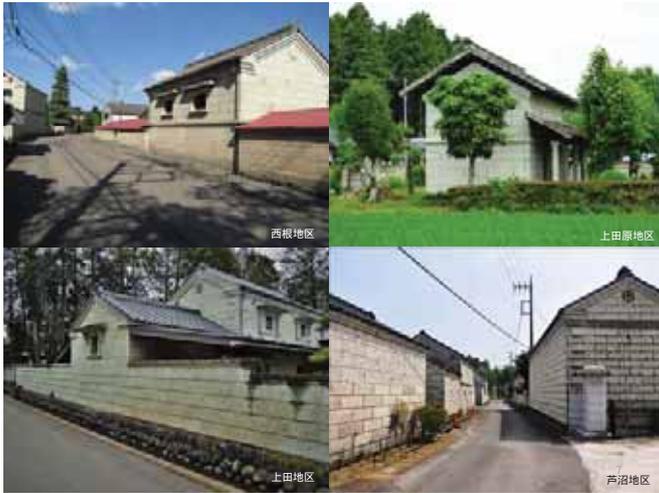
露天掘り



松が峰教会 (マックスヒンデル, 1932)



6



大谷石蔵集落の町並み



大谷石蔵集落の町並み調査

石の仕上げ

| 仕上げ | ツル目 | チェーン目 | ピシャン | 表面研磨 | コボリ |
|----------|----------|----------|----------|----------|--------|
| 地区 | | | | | |
| 西根 (70) | 24 (34%) | 10 (14%) | 14 (20%) | 14 (20%) | 5 (7%) |
| 上田 (104) | 23 (22%) | 29 (28%) | 18 (17%) | 30 (29%) | 2 (2%) |

手掘り



昭和30年代

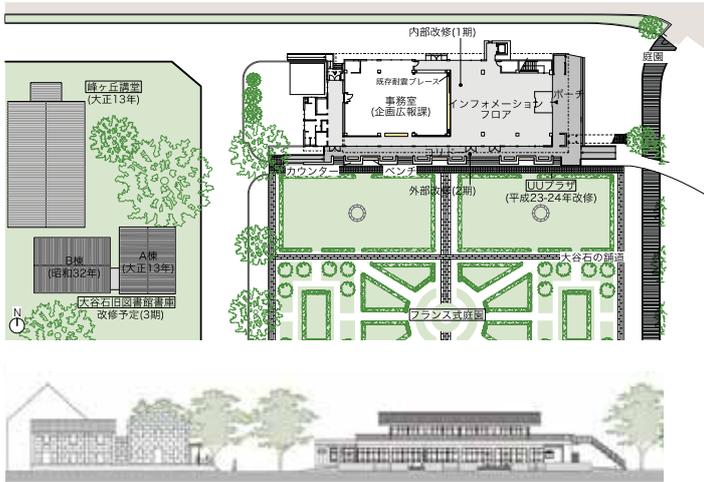


機械化



10





大谷アカデミー

設立の目的



技術を継承する後継者を育成します

1. 地域と連携・交流し、地域の経済や社会に貢献します。
2. 地域資源「大谷石」ブランドを確立し、次世代へ継承します。
3. 歴史を学び、伝え、創造し、未来へつなげます。

文化庁：文化遺産を活かした地域活性化事業 (2014～15)

17

■校長 藤本信義 宇都宮大学名誉教授
とちぎボランティアNPOセンター所長



■学科 毎週火曜夜7:00～9:00
学科長 安森亮雄 宇都宮大学准教授

常任講師
井上俊邦 宇都宮市職員
金子 修 大谷石産業(株)石材部長
飯村 淳 大谷石内外装材協同組合事務局
他にゲスト講師

■実技 隔週日曜9:00～12:00 午後は自主練習
実技長 渡邊哲夫 現帝国ホテルロビー壁面彫刻
講師
大塚明 東京スカイツリー展望ロビー貼石工事
半田英司 ちよっくら館、悠久の丘施工

18

講座受講生



2014 1期生 11名
 2015 1期生 4名
 2期生 2名
 2016 実技講座の継続

19

学科



講義
 ・大谷の歴史
 ・大谷石の構法・材料
 ・ライトと大谷石
 ・大谷石の建築事例

...



演習
 ・図面の読み方、書き方
 ・平面構成、立体構成
 ・模型
 ・新しい石塀の提案

...

20

見学会



明治村 (旧帝国ホテル)



武庫川女子学園 (旧甲子園ホテル)



復元レリーフ (現帝国ホテル)



山邑邸

21

実技



・掘ってみる
 ・ツキノミ
 ・平面課題
 (表札、干支の制作)
 ・立体課題
 (一輪ざし等)



・積石



・機械加工(円柱・半球)

22

2014 前期 生徒作品



前期課題：平面 干支



23

作品常設展示



あたらしい石塀：宇都宮大学安森研究室と共同提案



24

大谷石についての様々な取り組み



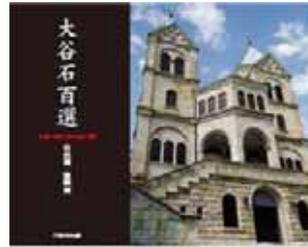
■NPO法人 宇都宮まちづくり推進機構
歴史的建物活用特別委員会

- ・大谷石マップ
- ・マッチング事業
- ・大谷石蔵フォーラム(石蔵活用)



■栃木県建築士会 宇都宮支部
(宇都宮市景観整備機構)
・中心市街地の石蔵調査

25



■NPO法人 大谷石研究会
(宇都宮市景観整備機構)

「大谷石百選」の刊行

大谷石蔵集落調査
(安森研究室と共同)

バスツアー

シンポジウム

大谷観光マップ



26



■宇都宮美術館

大谷石をめぐる連続美術講座
大谷石の来し方と行方
(2014)



開館20周年・市制施行120周年記念 企画展
石の街うつのみや
大谷石をめぐる
近代建築と地域文化
(2017.1～)

27



■LLP チイキカチ計画

OHYA UNDERGROUND
地底湖ツアー

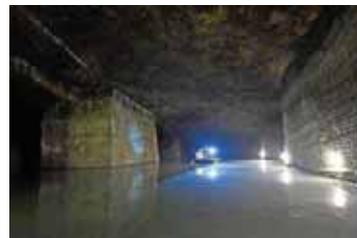


写真 OHYA UNDERGROUND ホームページより

28



■宇都宮市役所

□都市計画課・都市景観グループ

- ・まちなみ景観賞

□建築指導課

- ・大谷石建造物の補強改修の共同研究
(宇都宮大学)

□教育委員会文化課

- ・文化財等の調査把握
- ・「日本遺産」への取り組み

□産業政策課

- ・大谷石利用促進補助金
- ・地域振興(採石場跡地イチゴ栽培)

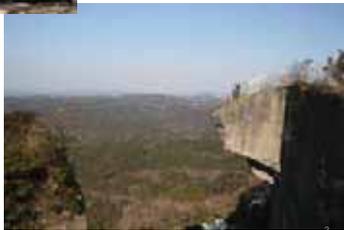
29



1



2

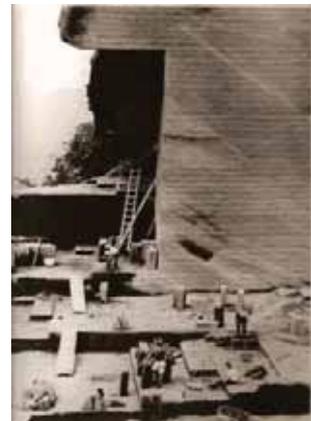


町に残る石の風景



5

石切で栄えた町



6



7



景光ノ麗 崖石山掘 橋本得安

8



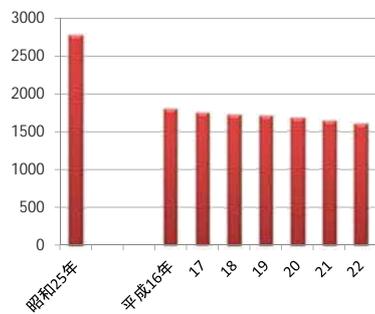
9



10

金谷の人口の推移

| | |
|-------|-------|
| 昭和25年 | 2,783 |
| | |
| | |
| 平成16年 | 1,798 |
| 17 | 1,756 |
| 18 | 1,729 |
| 19 | 1,709 |
| 20 | 1,678 |
| 21 | 1,641 |
| 22 | 1,608 |



11

鋸山コンサート



12

石の刻道



13

石釜づくり



14

石のまちシンポジウム



16



15

房州石里帰りプロジェクト



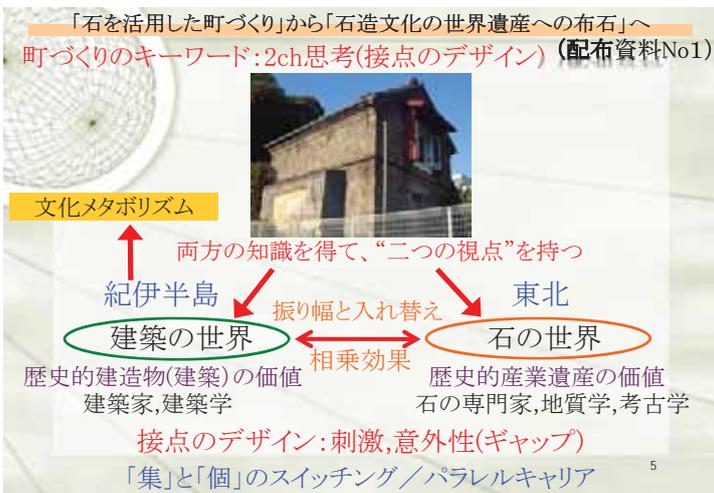
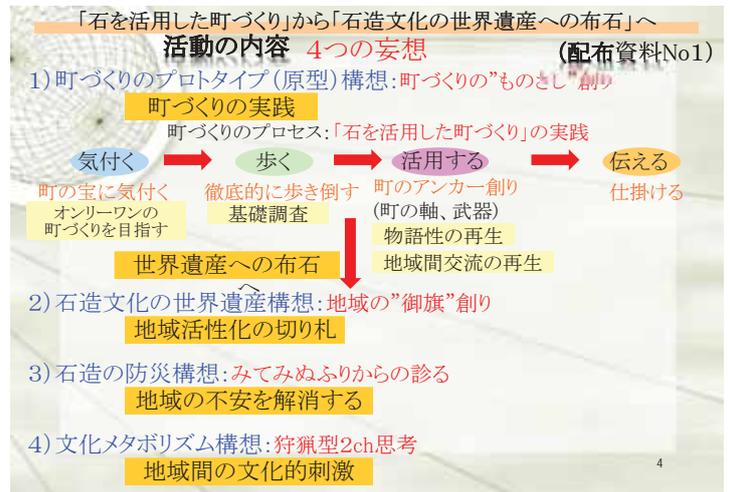
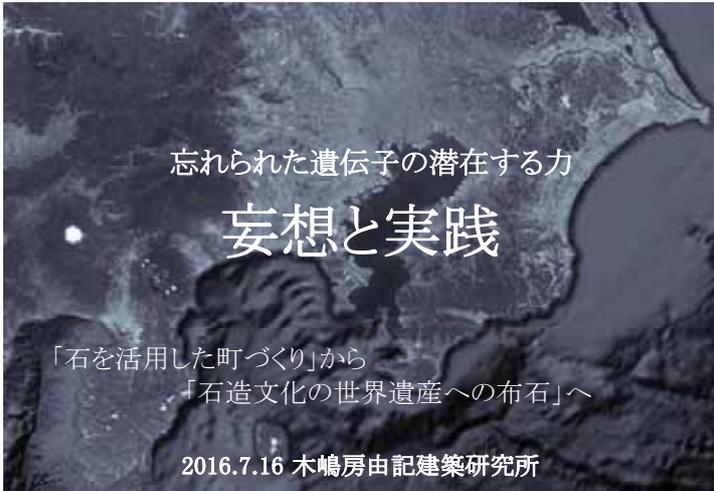
17

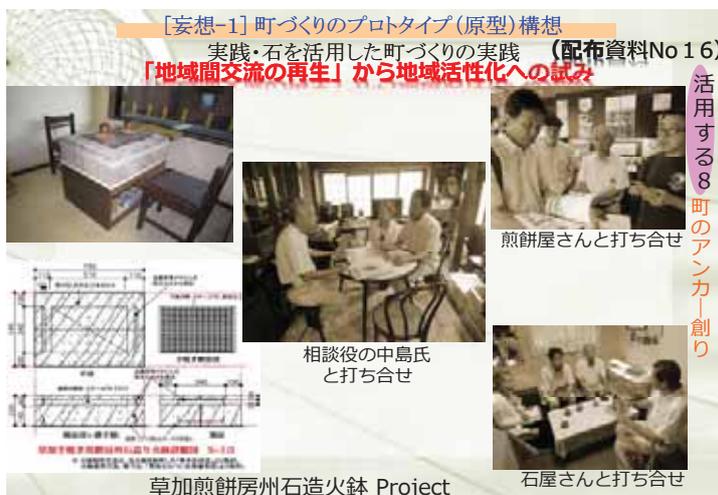


18



19





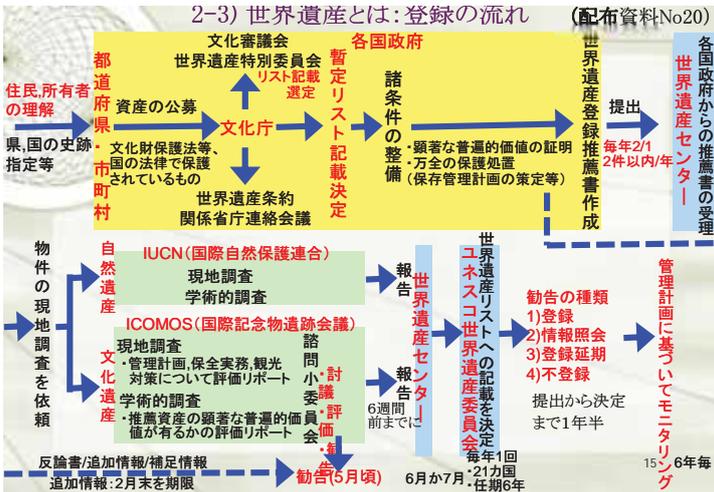


[妄想-2] 石造文化の世界遺産構想
 実践・世界遺産の基礎知識の習得 (配布資料No20)
世界的価値観を持った第三者の目を意識した物語性

世界遺産アカデミー概要
 ユネスコ世界遺産の啓発活動と人材育成事業
 : WHA会員、関係団体への活動支援
 世界遺産検定運営事業
 : 検定実施(年4回)、各級認定者・マイスター制度
 検定ガイダンス・対策講座の実施、Web講座の企画運営、公式テキスト・書籍出版、ユネスコ世界遺産基金への寄付
 イベント事業
 : 世界遺産に関する講演会や公開講座などの開催
 大使館セミナーおよび関連イベントへの協賛・後援
 WHA認定講師の養成・派遣

世界遺産アカデミー

世界遺産2 地域の御旗創り



[妄想-2] 石造文化の世界遺産構想
 実践・世界遺産の基礎知識の習得 (配布資料No20)
世界的価値観を持った第三者の目を意識した物語性

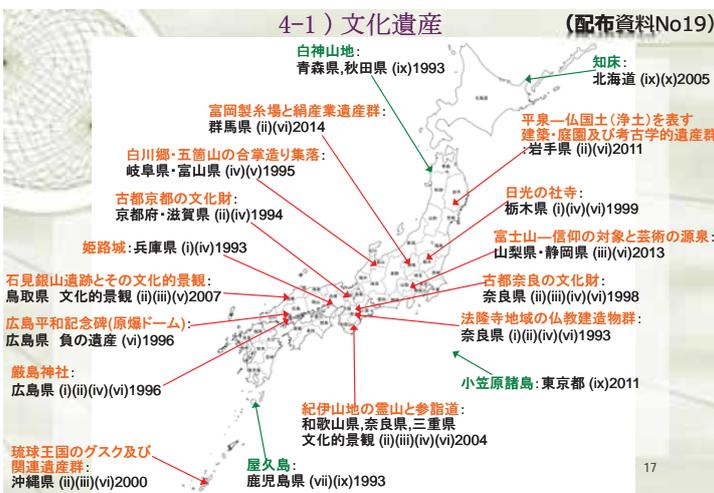
1. 顕著な普遍的価値
2. 世界遺産登録5条件
3. 世界遺産登録基準10項目
4. 真正性
5. 完全性

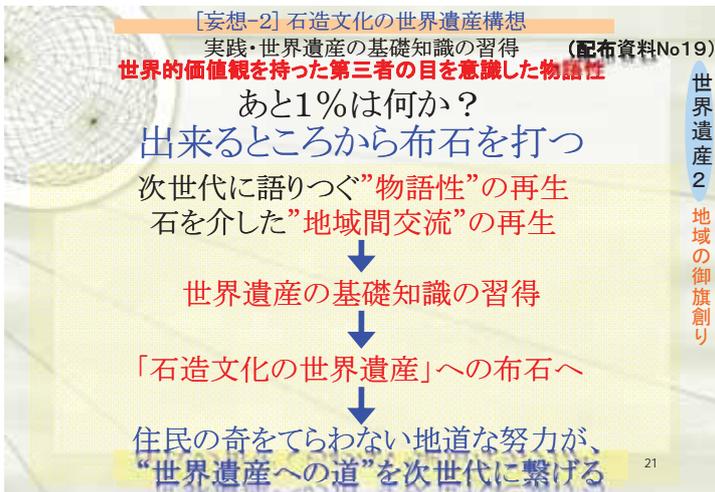
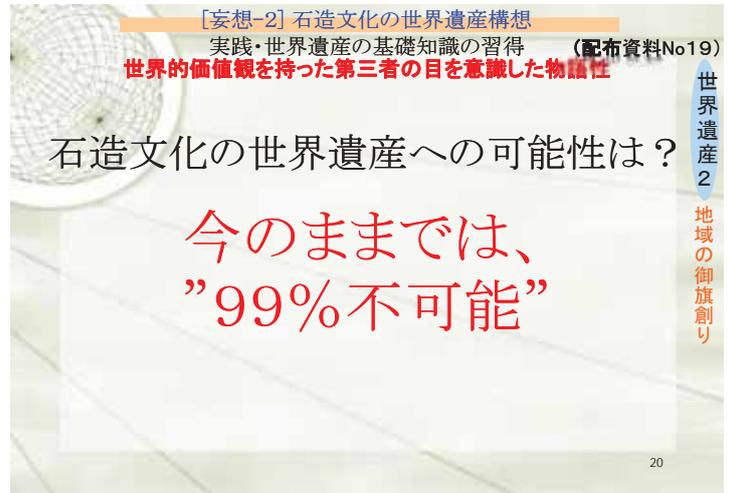
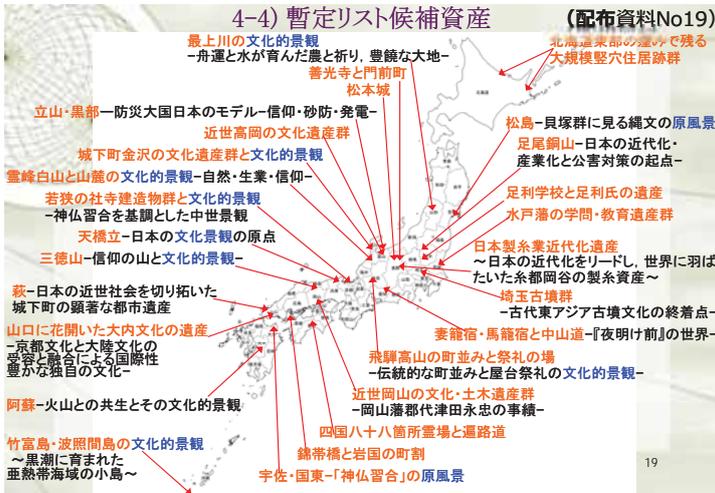
2. 世界遺産登録5条件

- 1)遺産を保有する国が**世界遺産条約の締約国**である事
ユネスコの加盟国である必要は無い。
- 2)遺産が**あらかじめ各国の暫定リストに記載**されている事
- 3)遺産を保有する**締約国自身からの推薦**である事
- 4)遺産が**不動産**である事
- 5)遺産が**保有国の法律等で保護**されている事

世界遺産登録条件

世界遺産2 地域の御旗創り





[妄想-4] 文化メタボリズム構想
実践・共通項(文化財)の可能性 (配布資料No24)
文化の異質物療法、標準語と方言のスイッチング

文化メタボリズム 1 狩猟型 2 ch 思考

2拠点移動
振り幅と入れ替え
相乗効果
文化的刺激

タリアセン・ウエスト(HPより) 紀伊半島
タリアセン・イースト(HPより) 東北

「言葉に成らないこと」
「形では無いもの」
「お金に換えられないもの」
の有機的増殖

25



● セミナー当日の配布資料

- ・ セミナーの諸注意 ※
- ・ 次第 ※

- ・ 「横浜市認定歴史的建造物 横浜山手聖公会」【資料】 ※
- ・ 横浜山手聖公会【リーフレット】 ※
- ・ 横浜山手聖公会【絵はがき】

- ・ 「横浜山手聖公会改修工事施工現場見学会の報告」【資料】 ※
- ・ 「横浜山手聖公会 大谷石施工現場見学会」5/24 見学会資料
- ・ (大谷石産業様作成)【資料】 ※

- ・ 「大谷石とその取り組み」【パワポ資料】
- ・ 「石の街うつのみや 遺産と景観」【リーフレット】 ※
- ・ 「房州石の今と昔」【資料】 ※
- ・ 「ネイチャーミュージアム 鋸山マップ」【リーフレット】 ※
- ・ 「忘れられた遺伝子の潜在する力 妄想と実践」【資料】 ※
- ・ 「忘れられた遺伝子の潜在する力 妄想と実践」【パワポ】
- ・ 「世界遺産アカデミー メンバーズレポート 第32号」【冊子】 ※

- ・ 横浜歴史資産調査会（ヨコハマヘリテイジ）【リーフレット】 ※
- ・ 歴史を生かしたまちづくりファンド【ちらし】 ※
- ・ 歴史を生かしたまちづくり相談室【ちらし】 ※
- ・ 横浜サポーターズ寄附金（ふるさと納税）【ちらし】 ※

- ・ アンケート用紙

※次ページ以降に表紙（1ページ目）のみを掲載しています

御参加の皆様へ

本日はお越しいただきありがとうございます。

今回のセミナーは、キリスト教会の聖堂を特別にお借りして開催しております。そのため、貸会議室や市民公会堂などとは異なり、使い方などに制約があります。特に、祭壇のある聖堂においては、配慮が必要になりますので、ご理解の程よろしくお願い申し上げます。

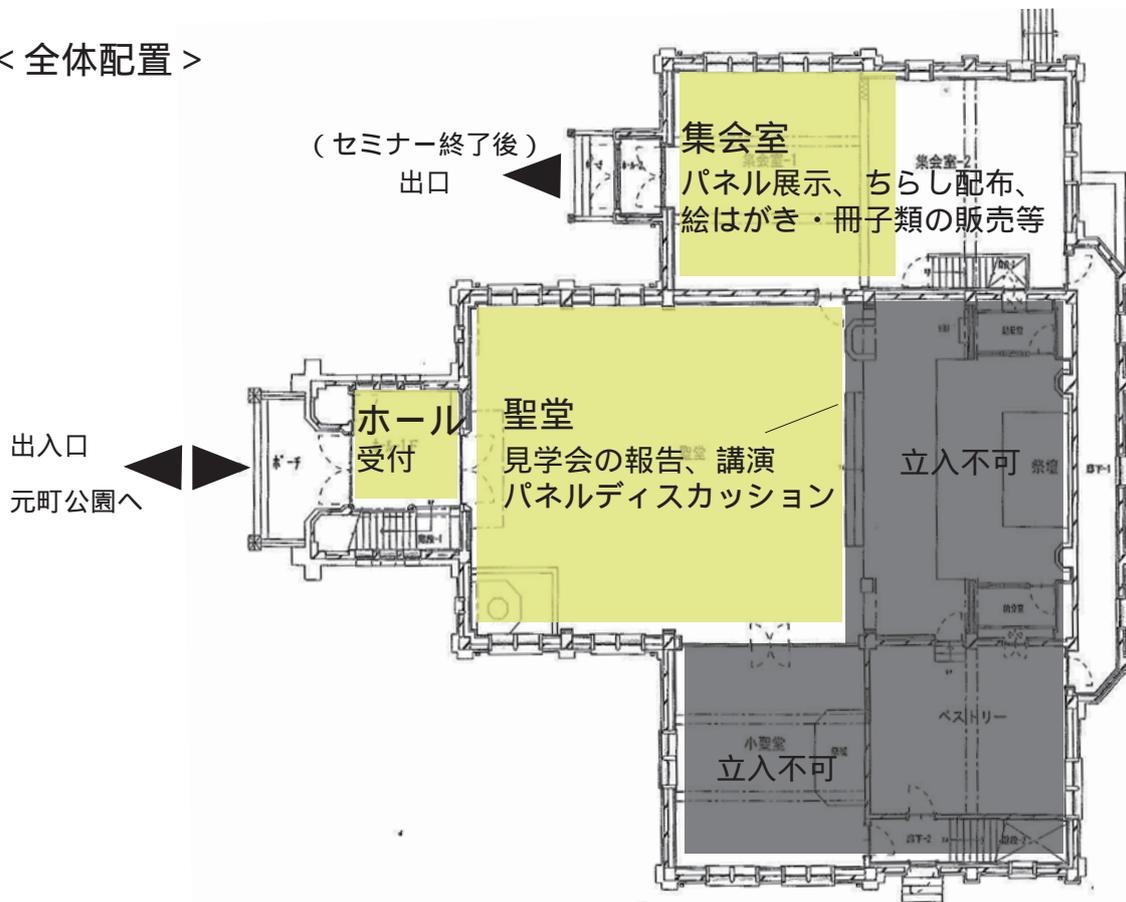
「聖堂」内の撮影は、ご遠慮ください。

腕章を付けた「報道関係者」「セミナー主催・教会関係者の代表3名」のみ撮影が許可されています。

教会の建物内での飲食は、ご遠慮ください。

トイレは、教会の向かい側「元町公園」をお使いください。

< 全体配置 >



歴史を生かしたまちづくりセミナー vol.39

「石の記憶」 次第

日程 平成 28(2016)年 7月 16日(土) 13:30-16:15

場所 横浜山手聖公会 聖堂

1 ごあいさつ

宮村 忠(公益社団法人 横浜歴史資産調査会 会長)

小池 政則(横浜市 都市整備局 企画部 部長)

2 横浜市認定歴史的建造物「横浜山手聖公会」の紹介

3 横浜山手聖公会施工現場見学会の報告

笠井 三義(JIA 神奈川 / カサイアーキテクチュラルデザイン)

4 講演

「石の記憶 ～横浜の歴史的建造物と石～」

青木 祐介(横浜都市発展記念館主任調査研究員 / 横浜市歴史的景観保全委員)

5 休憩

14:45-15:05 予定

集会室(聖堂の隣)において、パネル展示・冊子等の販売をしております

6 パネルディスカッション

パネラー：安森 亮雄(大谷アカデミー学科指導長 / 宇都宮大学准教授)

木嶋 房由記(世界遺産アカデミー認定講師 / 木嶋房由記建築研究所)

鈴木 裕士(金谷美術館理事長)

コメンテーター：青木 祐介

コーディネーター：米山 淳一(地域遺産プロデューサー / 横浜歴史資産調査会常務理事・事務局長)

<敬称略>

横浜市認定歴史的建造物

『横浜山手聖公会』



1 歴史的建造物の概要

- | | |
|-------------|--------------------------------|
| (1) 名 称 | 横浜山手聖公会 |
| (2) 所 在 地 | 横浜市中区山手町 235 番地 |
| (3) 建 築 年 | 昭和 6 (1931)年 |
| (4) 設 計 者 | J. H. モーガン |
| (5) 施 工 者 | 不詳 |
| (6) 構造・規模 | 鉄筋コンクリート造 1 階建 (一部 3 階、地下 1 階) |
| (7) 外 壁 仕 上 | 大谷石貼り |

2 沿革

- | | |
|---------------|-----------------------------------|
| 文久 2 (1863)年 | 山下町 105 番地にクライストチャーチを建立 |
| 明治 34 (1901)年 | 現在地にイギリス人建築家 J. コンドル設計の煉瓦造教会建設、移転 |
| 大正 12 (1923)年 | 関東大震災にて倒壊 |
| 昭和 6 (1931)年 | 現在の建物が再建される |
| 昭和 20 (1945)年 | 空襲にて屋根等を損傷 |
| 昭和 22 (1947)年 | 戦災による被災箇所等を修復 |
| 昭和 57 年頃 | 屋根の修理及び外壁等の補修 |
| 平成 2 (1990)年 | 歴史的建造物として横浜市に認定される「横浜市認定歴史的建造物」 |

Yokohama-Yamate-Sei-Ko-Kai
Yokohama Diocese
The Holy Catholic Church in Japan
~ Anglican/Episcopal Church ~



王なるキリストの十字架

主イエス・キリストの別名は、「信頼・希望・愛・平和」です。信頼を裏切れば、人は傷付きます。そういう形で、救い主はこの世を支配しておられます。主イエス・キリストを知ることによって、本当の信頼・希望・愛・平和を、自分のものとし、悪に飲み込まれない人生を送ることが出来ます。当教会のキリスト像は、2005年の火事の際にも無事に残り、信じ仰ぎ見る者に、豊かな祝福を与え、歩むべき方向を指し示して下さいます。どうぞ、聖堂内で静かに御像と対峙し、沈黙の内に語りかけ、静かに心を開いて応えを受け止められますように。



日本聖公会 横浜教区
横浜山手聖公会

〒231-0862 横浜市中区山手町 235
TEL 045-622-0228 FAX 045-621-3445

横浜山手聖公会改修工事施工現場見学会の報告

2016年7月16日 日本建築家協会(JIA 神奈川) 笠井 三義

1・2016年5月24日改修現場見学会について

2・改修の内容・規模・今までの経緯

3・改修の現場をみて

4・設計者 J・H モーガンについて

5・栃木県宇都宮 大谷石について

6・大谷石の他の建物について

2016年5月24日

横浜山手聖公会 大谷石施工現場見学会

大谷石産業株式会社
担当 飯村

1. ご挨拶
横浜市
大谷石産業
2. 本日の流れご説明
3. 工期、施工方法など
4. 施工現場見学
くれぐれも気をつけて見学願います。
何かあった場合には責任を負いかねますのでご了承願います。
5. 質疑応答
6. 大谷石について



石の街

Utsunomiya - The City of Ooya Stone

うつのみや



遺産と景観
Heritage and Cityscape

石の街 うつのみや

- 企画・編集 宇都宮まちづくり推進機構 歴史的建物活用特別委員会
- 監修 塩田 謙(歴史的建物活用特別委員会・前委員長)
- 執筆・撮影協力 橋本 優子(宇都宮美術館)
- エディトリアル・デザイン 半田 明宏 (graphic hand's)
- 写真撮影・提供 be off
- 宇都宮大学大学院 安藤英雄研究室
- シオダ建築デザイン事務所
- 橋本 隼(日本大学芸術学部写真学科)
- 制作 下野新聞社 事業出版部
- 発行 宇都宮まちづくり推進機構

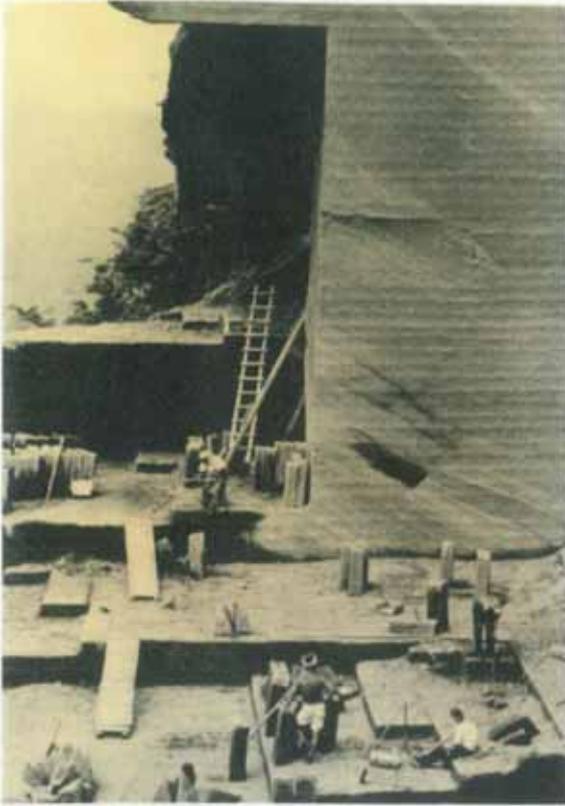
〒320-0806 栃木県宇都宮市中央3-1-4 栃木県産業会館2階 TEL.028-632-8215
<http://www.machidukuri.org/>

©2015 The Utsunomiya Community Development Organization

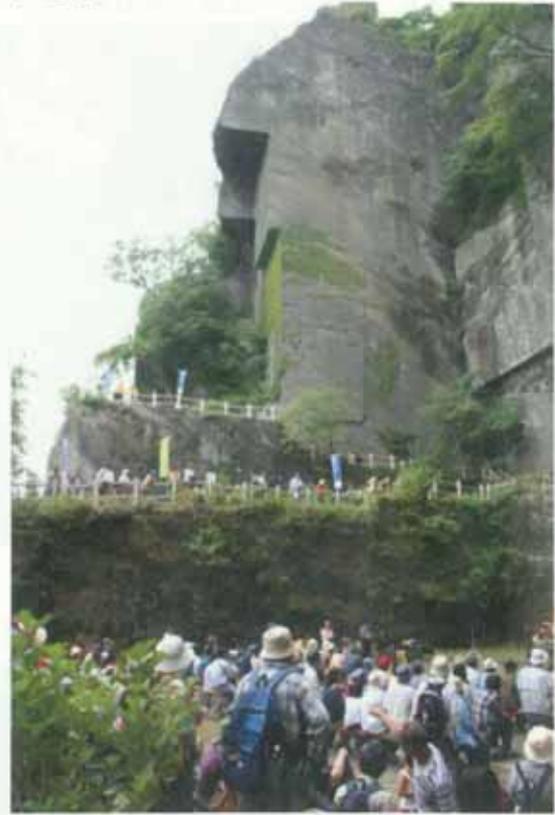
禁・無断転載 Printed in Japan, all rights reserved.

【表紙図版】宇都宮市内各所で採集した大谷石(撮影=橋本 優子)

房州石の今と昔



昭和 20 年代後半の石切り場



現在の石切り場 (鋸山コンサート)



景光ノ棚採材石山鋸

勝名房安

石切り場 (大正時代)

■ アクセス



[電車]

JR 内房線浜金谷駅から 徒歩約10分

[お車]

東京湾アクアライン～館山自動車道 富津金谷 IC～
国道 127 号線を館山方向へ 約5分

[カーフェリー]

東京湾フェリー久里浜港～金谷港 約40分
金谷港から国道 127 号線を館山方向へ徒歩約12分



安房の地は、「南総里見八犬伝」の舞台とも言われます。鋸山の西部に安房国里見家の城でもあった金谷城の基礎跡が発掘されています。鋸山登山の一つの趣向として、八犬士が持って活躍する数珠玉に見立てた鋸山の数珠玉を探しながらの散策はいかがでしょうか、人道を説く八徳の数珠玉には一つ一つ意味が有ります。清浄な山風に触れながら「荘厳な八つの遺跡」を巡ると思わぬ幸運が訪れるかもしれません。また、漫画「ドラゴンボール」は、「西遊記」と共に「南総里見八犬伝」をモチーフの一つとしたとも言われます。

金谷観光案内所

千葉県富津市金谷 3869-2
TEL 0439(69)2840



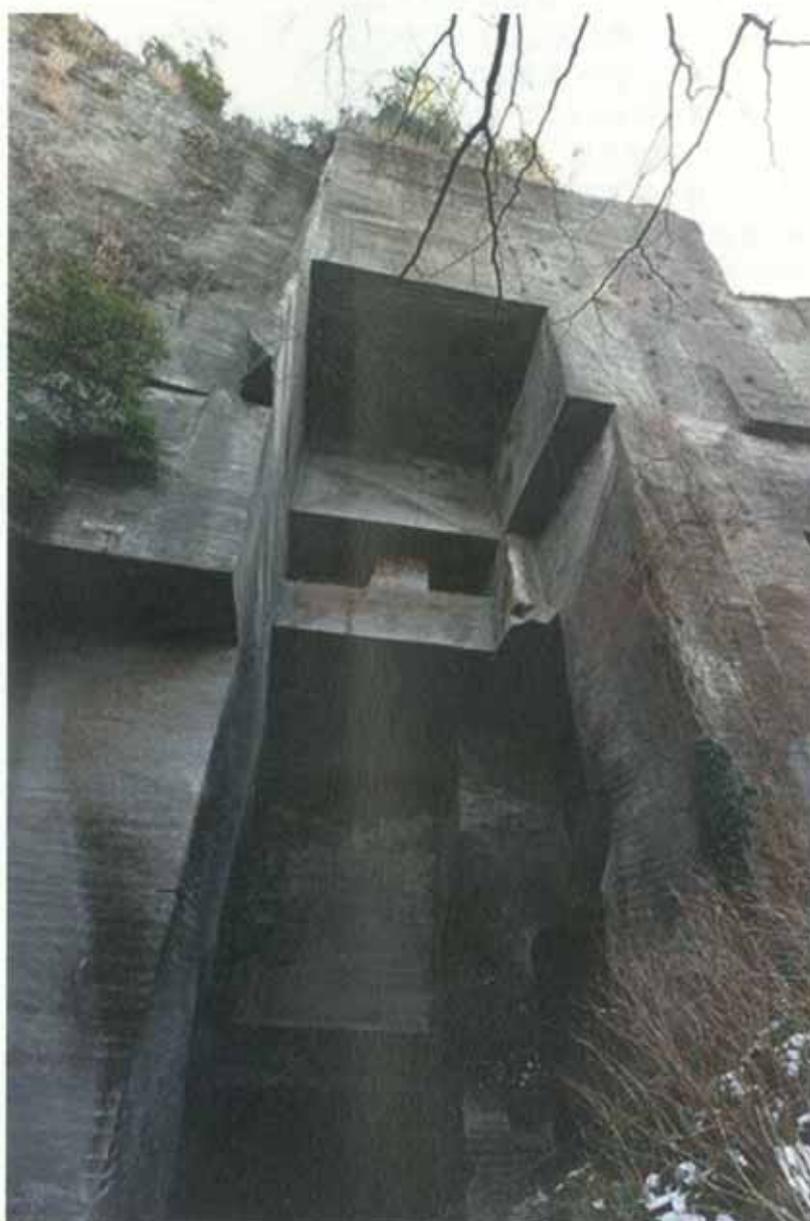
※ 龍図イメージ

ネイチャーミュージアム
鋸山マップ
南房総国定公園





忘れられた遺伝子の潜在する力 妄想と実践



「石を活用した町づくり」から「石造文化の世界遺産への布石」へ
東京湾、相模湾、駿河湾周辺から伊豆半島にかけての「石造文化」の世界遺産への試み

2016.7.16 FUSAYUKI KIJIMA ARCHITECT&ASSOCIATES

学んで守る、旅で伝える

世界遺産アカデミー

WHA MR

メンバーズレポート



World Heritage Academy

2016年 夏号
第32号



アフガニスタン特別企画展「パーミヤン大仏天井壁画～流出文化財とともに～」
完全復元されたパーミヤン「東大仏龍天井壁画」 / © 東京藝術大学

P.2 ~ P.5... View Point 32 巻頭インタビュー

文化遺産国際協力コンソーシアム 副会長 前田 耕作 氏

「文化遺産保護による国際貢献が、我々の使命です」

P.6..... 新・マイスター見聞録

P.7..... WHA member Report

P.8 ~ P.9... Academy News

P.10 WHA 認定講師 File #23

P.11 WHA member File

P.12 未来の世界遺産 #10 / 編集後記

【ヨコハマヘリテイジは免税団体です】



YOKOHAMA HERITAGE

公益社団法人 横浜歴史資産調査会
(ヨコハマヘリテイジ)

■ ヨコハマヘリテイジサポートクラブ (会員案内)

会の活動を支えてくださる会員を募集しています。本会の主旨に賛同してくださる方であれば、どなたでもご入会いただけます。

入会をご希望される方は下記連絡先まで、ご連絡をお願いします。追って入会案内をお送りさせていただきます。

個人会員 本会の趣旨に賛同してくださる個人の方

年会費：3,000円 ・「歴史を生かしたまちづくり 横浜新聞」最新号のお届け
・会員向けメールマガジンの発行
・セミナー、イベント等の情報提供
・有料セミナーの割引
・本会発行の出版物の割引販売
・関連施設等での優待(予定)

団体会員 本会の趣旨に賛同してくださる団体の方

年会費：30,000円 個人会員の特典に加え
・会報等、会の広報物への広告掲載の優待
・メールマガジンで団体会員のイベント等の情報を協力配信

賛助会員 本会の趣旨に賛同してくださる個人又は団体の方

1口：50,000円 個人会員の特典に加え
・会報等、会の広報物への広告掲載 無料
・メールマガジンで団体会員のイベント等の情報を協力配信
・ウェブサイトでの団体紹介

■ ヨコハマヘリテイジは免税団体です

歴史的資産の保存活用を推進するために、皆様のご寄付をお願いしております。ご寄付を頂いた方には、免税証明証を発行いたします。どうぞよろしくお願い致します。

【連絡先】

公益社団法人 横浜歴史資産調査会 (ヨコハマヘリテイジ)

〒231-0012

横浜市中区相生町3丁目61番地 泰生ビル405号室

TEL/FAX: 045-651-1730

Mail: yh-info@yokohama-heritage.or.jp

URL: <http://www.yokohama-heritage.or.jp/>

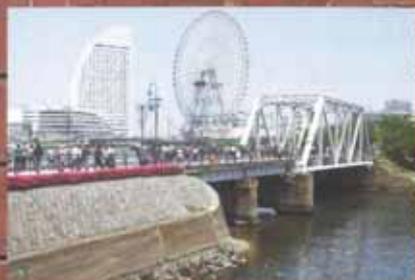
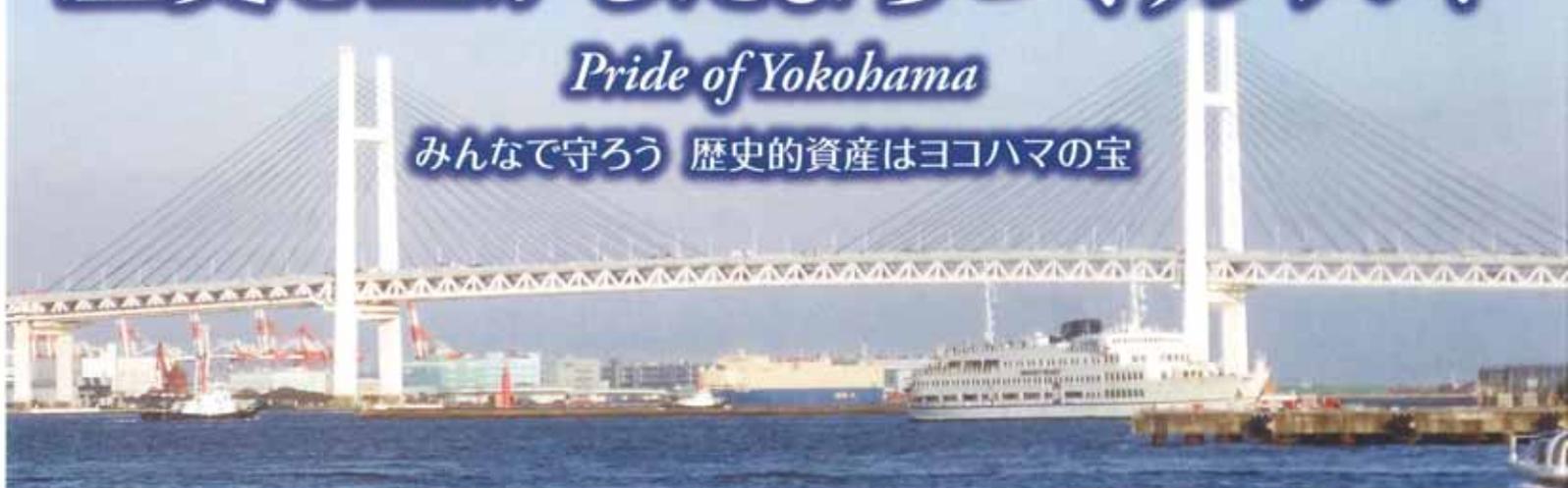
リーフレット内写真 撮影：米山 淳一

歴史を生かしたまちづくりファン

(当日配布資料)

Pride of Yokohama

みんなで守ろう 歴史的資産はヨコハマの宝



YOKOHAMA HERITAGE

公益社団法人 横浜歴史資産調査会

歴史を生かしたまちづくり相談室のご案内

公益社団法人横浜歴史資産調査会（ヨコハマヘリテイジ）では、横浜市と連携し、歴史的建造物の保全活用など歴史を生かしたまちづくりに取り組んできました。

近年、歴史的建造物を取り巻く状況は大きく変化し、所有者の抱える悩みも複雑化し、深刻になっています。これらの状況を踏まえ、きめ細やかな所有者支援を行うため、公益社団法人横浜歴史資産調査会（ヨコハマヘリテイジ）内に「歴史を生かしたまちづくり相談室」を開設しました。主に歴史的建造物の所有者を対象として、専門家や関係活動団体、行政が連携し、具体的な対応策について提案していきます。

相談は無料で、どなたでもお申込みいただくことができますので、お気軽にご利用ください。

1 相談方法

ヨコハマヘリテイジのホームページに直接入力又は、裏面の相談シートに必要事項を記入の上、郵送、Eメール、ファクシミリにより公益社団法人横浜歴史資産調査会（ヨコハマヘリテイジ）にお申込みください。また、毎週水曜日には電話による相談も受け付けます。

| | |
|------|---|
| 送付先 | 公益社団法人横浜歴史資産調査会（ヨコハマヘリテイジ）内 「歴史を生かしたまちづくり相談室」係 |
| 電話 | 045-651-1730 ※毎週水曜日 午前10時から午後3時まで（年末・年始・祝日を除く） |
| FAX | 045-651-1730（随時） |
| Eメール | yh-info@yokohama-heritage.or.jp（随時） |
| 郵送 | 〒231-0012 横浜市中区相生町3-61 泰生ビル405号室（随時） |

2 相談内容の例

- ・ 自宅は古いが、歴史的価値があるのか分からないので調べてほしい。
- ・ 建物は残したいが、相続が発生すると家族で持ち続けることが困難なので、よい方法はないか。
- ・ 歴史的建造物の改修を任せられる腕の良い職人を教えてほしい。 など

3 対応方法

受け付けた相談については、専門家、ヨコハマヘリテイジ事務局員、横浜市都市デザイン室職員等が内容を検討の上、相談内容にお応えします。また必要に応じて、現地確認や詳細のヒアリングなどのため、ヨコハマヘリテイジからアドバイザーを派遣する場合があります。

<公益社団法人横浜歴史資産調査会（ヨコハマヘリテイジ）>とは・・・

歴史的建造物に係る専門家等の団体。昭和63(1988)年に「横浜市歴史的資産調査会」として発足して以来、横浜市と連携して歴史的建造物の調査や保全活用に関する調査研究のほか、セミナーや見学会等の普及啓発などを行っています。平成25年度からは公益社団法人となりました。

(ホームページ) <http://www.yokohama-heritage.or.jp/>

○問合せ・連絡先

公益社団法人横浜歴史資産調査会（ヨコハマヘリテイジ）内「歴史を生かしたまちづくり相談室」係
電話・FAX: 045-651-1730（月・水・金） Eメール: yh-info@yokohama-heritage.or.jp



▲ベリック・ホール (横浜市中区)

横浜の歴史的建造物の役に立つ、ふるさと納税です。

横浜市では全国に先駆け、昭和63年に要綱を設置し「歴史を生かしたまちづくり」を進めてきました。そして、平成28年度から「ふるさと納税」を導入した「歴史的景観保全活用事業」を始めます。景観上重要な歴史的建造物を使い続け、街づくりに生かすための「リノベーションに対する助成金」や街なかの歴史的建造物を紹介する「サイン・説明板」の設置などに充てていきます。

! こんな方におすすめ

古民家カフェが好き。

倉庫をリノベーションした、オフィスで働きたい。

古くて趣きのあるゲストハウスに、泊まってみたい。

横浜の歴史的建造物が取り壊されると悲しくなる。

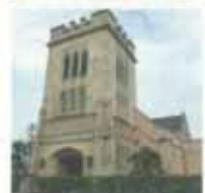
? リノベーションに対する助成金

保全した歴史的建造物の建物内部の改修に助成するものです。建物の歴史的価値を高めるためや、現状の使い方を変えることで、都市の魅力としてさらに活用するために行います。

▶例えば・・・

横浜市内の歴史的建造物について、大きな戸建住宅をシェアハウスに、また飲食店から宿泊施設、そして倉庫からカフェ…等といった改修事業に対する補助を予定しています。

リノベーション助成金は、専門性のある中間支援団体を通じて所有者等に助成されます。

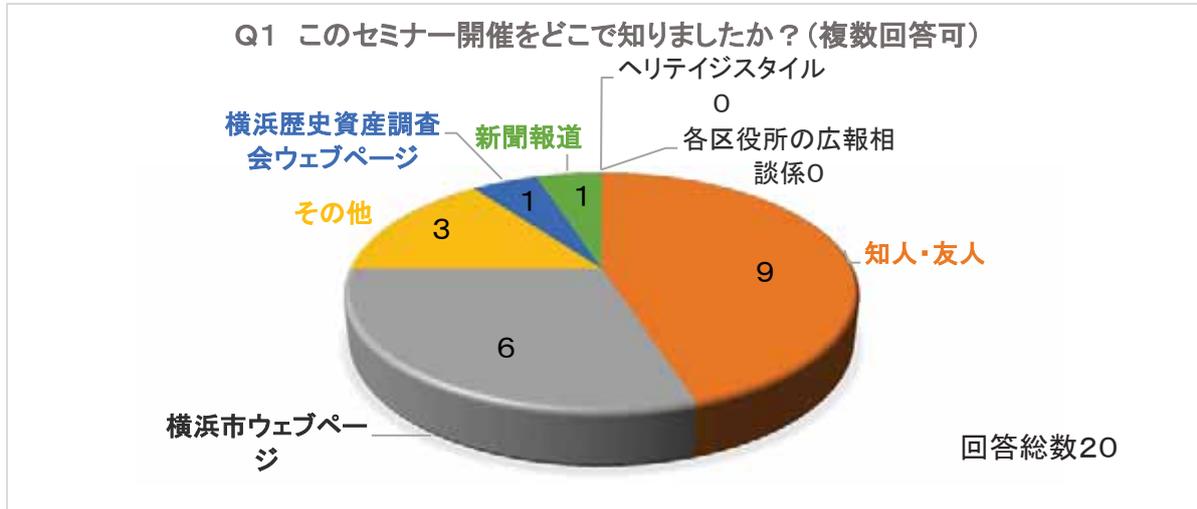


具体的なふるさと納税の方法は、裏面を御覧ください。

問合せ：横浜市都市デザイン室 tel 045-671-2023 tb-toshidesign@city.yokohama.jp

3 アンケート結果

歴史を生かしたまちづくりセミナー vol.39
「石の記憶」アンケート結果



Q4 今後、セミナーで取り上げてほしいテーマや内容はありますか？

- ・橋やトンネル等の土木遺構など
- ・普段気がつかない横浜の遺構を紹介
- ・横浜の「道」の歴史、横浜の「水」の歴史
- ・横浜の石造りの土木等々
- ・今回は石材がテーマであったが、歴史的建造物を構成する材についてもう少し取り上げて欲しい。例えばタイル、金属加工、ガラス（ステンドグラス以外）。また、横浜のまち並を構成していた建材と生産地の繋がりについても面白いと思う。

4 広報ちらし

石の記憶

歴史を生かした
まちづくり
セミナー
vol.39

日程

平成 28(2016)年 7月 16日(土)

午後 1時 30分 から 午後 4時 15分 まで (受付開始: 1時)

場所

横浜山手聖公会 聖堂(横浜市中区山手町 235)

参加費等

1,000円(抽選 100名、事前申込制・7/4 締切)

裏面の応募要領のとおりお申し込みください

内容

(1) 横浜山手聖公会施工現場見学会の報告

笠井 三義(JIA 神奈川 / カサイアーキテクチュラルデザイン)

(2) 講演

「石の記憶 ~ 横浜の歴史的建造物と石 ~」

青木 祐介(横浜都市発展記念館主任調査研究員 / 横浜市歴史的景観保全委員)

(3) パネルディスカッション

パネラー: 安森 亮雄(大谷アカデミー学科指導長 / 宇都宮大学准教授)

木嶋 房由記(世界遺産アカデミー認定講師 / 木嶋房由記建築研究所)

鈴木 裕士(金谷美術館理事長)

コメンテーター: 青木 祐介

コーディネーター: 米山 淳一(地域遺産プロデューサー / 横浜歴史資産調査会常務理事・事務局長)

< 敬称略 >

主催: 公益社団法人 横浜歴史資産調査会 / 横浜市 都市整備局 共催: 公益社団法人 日本建築家協会 (JIA) 関東甲信越支部 神奈川地域会

後援: 大谷アカデミー 協力: 日本聖公会横浜教区 横浜山手聖公会・横浜クライストチャーチ

第 39 回 歴史を生かしたまちづくりセミナー
「石の記憶」
実 施 報 告 書

発行日：平成 29 年 7 月 26 日（都デ第 125 号）

発行：横浜市 都市整備局 都市デザイン室

〒231-0017 横浜市中区港町 1-1

協力：公益社団法人 横浜歴史資産調査会